石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の補刻の様相について

上原究一
荒木達雄
東京大學

はじめに

天都外臣序刻本『水滸傳』とも呼ばれることのある石渠閣補刻本『忠義水滸傳』百卷百回は、一九五四年に人民文學出版社から刊行された排印本『水滸全傳』（以下これを五四排印本と稱す）の鄭振鐸「序」において「明萬曆十七年己丑（一五八九年）天都外臣（汪道昆）序刻本」（五頁）と紹介されることで初めてその存在が廣く知られるようになり、同時に五四排印本の插增二十回を除いた部分の底本とされた版本である。

鄭振鐸「序」はこの版本について「可惜的是、我們用作底本的天都外臣序刻本、竝非萬曆時初印本：其中有不少篇頁、是清康熙間石渠閣補刻的。有的補刻篇頁、似更在其後。在那些補刻的篇頁中、還沒有發現多大的竄改之迹、可能補刻時還是根據了一部初印本的。但所有補刻的部分、我們仍在校勘記裏面一一註明」（六頁）と述べているが、五四排印本にはこの版本の所在は記されておらず、書影も一枚も掲載されなかった。また、五四排印本は末尾に附錄として五種の版本からそれぞれ一つずつ序文を載せているが、その一つめが、この版本のものだという、末尾に「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」と署名される「水滸傳叙」である。

五四排印本には白木直也「排印「水滸全傳」への批判と提言――諸本研究の立場よりする――」（『東方學』第四十五輯、一九七三）や高島俊男「水滸傳「石渠閣補刊本」研究序說」（『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』所收、汲古書院、一九八六）で指摘されている數々の問題點があるものの、どの葉がいかなる種類の補刻であるかについての非常に詳しい情報や、各卷第二～三行に記された「施耐菴集撰／羅

貫中纂修」の上に「李卓吾評閲」の五文字が埋木改刻によって加えられている卷があることなどが、各回の末に附された校勘記から讀み取れるようにはなっている。

その後、王利器「關於『水滸全傳』的版本及校訂」（原載『文學書刊介紹』一九五四年第三期、本稿では『水滸研究論文集』（作家出版社、一九五七）所收に據った）では、吳曉鈴氏（こちらは途中で校勘の任を離れたという）と竝んで五四排印本における校勘作業の責任者であった王利器氏が、補刻の種類についてのより具體的な様相と、補刻の時期についての自身の見解とを記すとともに、この版本には全く評が附されていないということを初めて明かしている。だが、所在についてはここでも觸れられなかった。

續いて孫楷第『中國通俗小說書目』改訂版（作家出版社、一九五七）が、この版本を

天都外臣序本水滸傳一百卷一百回

存　明翻嘉靖本。正文半葉十二行、行二十四字、有圖。題「施耐庵集撰」「羅貫中纂修」、首天都外臣（汪道昆）序。

と著錄した（一八三頁）。ここで初めて序が全體の最初にあることや本文の行款が明記され、圖があることも公にされたが、またもや所在は記されていない。同書が「存」とする版本について所在を記さないのはありふれた通行本以外では異例であるが、同書の一九五七年一月の北京第一版第一次印刷には間に合わずに一九五八年一月の北京第二次印刷本で加えられた孫楷第「重訂通俗小說書目序」（一九五七年十一月六日付）は、張榮起氏が孫楷第氏に代わって補訂した若干種の版本の一つとして、「鄭西諦先生藏天都外臣序本水滸傳」を擧げている。よって、孫氏自身はこの版本を未見であったことや、鄭振鐸氏（西諦は鄭氏の號）の個人的な藏書だと認識していたことが窺い知れる。なお、高島前揭論文は張氏も原本を見てはおらず傳聞によって書いたのではないかと推測しているが、所在を明記していないところを見ると、その可能性は十分にあり得る。なお、同書の再訂版（人民文學出版社、一九八二）では先の引用の「明翻嘉靖本」の直後に「有清朝補版」の五文字が追加されたが（二一一頁）、所在はこの版にも再錄された「重訂通俗小

說書目序」以外には記されないままであった。

そして、一九八三年八月二日の『光明日報』に掲載された吳曉鈴「漫談天都外臣本『忠義水滸傳』――雙楷掇瑣之四」（本稿では『吳曉鈴集』（河北教育出版社、二〇〇六）所收に據った）において、來薫閣書店の主人であった陳杭氏が蘇州で入手したこの版本を上海で胡適氏に見せたところ、北京に歸ったら吳曉鈴氏に見せるよう勸められ、（吳氏の記憶によれば一九四九年の秋に）それを見せられた吳氏が陳氏の同意を得て副本を作成した上で、鄭振鐸氏とともに擔當していた北京大學の授業で學生に校勘と斷句を行わせたのが五四排印本の基となり、原本については吳氏らの勸めもあって陳氏が國家に寄贈し、一九五〇年七月一日に北京圖書館（現在は中國國家圖書館に改稱）の所藏に歸した、という發見の經緯と正式な所藏者がようやく明らかにされた。同時に、この版本を「萬曆十七年天都外臣序本」であるとする唯一の根據である序末の署名がある行は、文字の右端が僅かに見える程度しか紙が殘っておらず、五四排印本に記されて以來信じられて來た「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」というのは吳氏と戴望舒氏とが判讀の一案として鄭振鐸氏に示した憶測がそのまま採用されたものであるという重大な問題も告白されており、問題の序末の書影も初出時には掲載されていた（『吳曉鈴集』所收版には書影は未收錄）。

高島前掲論文は以上のような經緯をまとめた上で、吳曉鈴前掲論文が出るまで「かくて、この「天都外臣序本」は、水滸研究上（ただに版本研究のみではなく）きわめて重要な位置を占める本でありながら、研究者は現物も寫眞も見ることができず、「五四排印本」を手がかりに甲論乙駁するほかなく、あとにのべる如く「かくも多くの時間と精力」が浪費される狀態がつづいてきたのであった」（五七一頁）と述べ、更に吳曉鈴前掲論文から序末の書影を轉載して、「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」というという判讀が「無茶としか言いようがない」（五七五頁）と指摘している。高島氏はその一方で、五四排印本によって本文の對校を行った限りでは「石渠閣補刊本（の原刊部分）は、現存容與堂三本のいずれよりも古いと考えられるのである」（五八九頁）という指摘もしており、「石渠閣補刊本、および未公開の容

與堂諸本の影印本刊行が待たれる。それを得て、石渠閣補刊本原刊部分の位置づけはさらに明確になるであろう」（五八二～五八三頁）と當該論文を結んでいる。

本の所在が明かされたのみならず、中國國家圖書館藏本の全册を撮影したマイクロフィルムがそれに先立って一九七〇年代にシカゴ大學東亞圖書館に收められたり（馬幼垣『水滸二論』（初出の繁體字版は聯經出版、二〇〇二。本稿では後出の簡體字版（三聯書店、二〇〇七）に據った）四一〇頁參照）、中國國家圖書館におけるマイクロフィルムや原本の閲覽も年々容易になってきたりはしたものの、依然として影印本は出版されず、中國國家圖書館では複寫に三分の一までという分量の上限が設けられているため、この本の全貌の把握が容易ではない狀況はつい昨年まで續いて來た。例えば、馬蹄疾『水滸書錄』（上海古籍出版社、一九八六）に原本を調査した上でのものと思われる著錄があり、馬幼垣前掲書には馬幼垣氏が入手したマイクロフィルム①に基づいた研究の成果である「問題重重的所謂天都外臣序本『水滸傳』」（一〇〇～一一三頁及び卷頭插圖一八～二三）、「所謂天都外臣序本『水滸傳』尙未發現第二套存本」（四〇九～四一〇頁）、「從挂名天都外臣序本『水滸傳』的插圖看該本的素質」（四一一～四二三頁及び卷頭插圖三二～五〇）という三篇の論文が收められているのだが、馬蹄疾前掲書と馬幼垣前掲書とでは、版心に「石渠／閣補」と刻されている葉の數や、同じく「康熙五年／石渠閣補」と刻されている葉の數が、いずれも食い違っている。それのみならず、その文字が刻されているか否かという極めて明白な指標がある點についての食い違いでありながら、鄧雷『水滸傳版本知見錄』（鳳凰出版社、二〇一七）は兩氏の擧げるそれぞれの數を併記しているだけで、それぞれ實際には何葉あるのかの再檢證は行っていない。だが、石渠閣補刻本は全體で千三百葉を超える大部なもの（詳細後述）なので、再檢證を行うには原本またはマイクロフィルムの所藏元に何日も通い詰める必要があった。それを踏まえれば、鄧雷氏の處置にも無理からぬ面があったと言うべきであろう②。

そうした狀況を一變させたのが、東京古典會の平成二十九年度古典籍展觀大入札會に出品されて平田昌司氏が落札

した、中國國家圖書館藏本と同版と思われる新たな傳本の出現であった。發見の詳しい經緯は本誌に收める小松謙「日本傳存の石渠閣補刻本『忠義水滸傳』發見の經緯」を參照されたいが、ここにおいて原本やマイクロフィルムの所藏元に行かずとも平田氏藏本の寫眞によって研究を進めることが出來るようになるとともに、從來知られていた中國國家圖書館藏本と新出の平田氏藏本が本當に同版なのかどうか、確かに同版であるとすればどちらがより刷りが早いのか、平田氏藏本の出現によって補刻の狀況に關して新たな知見が得られるのか、などといった問題を檢證する必要が生じたのである。

發見に携わった者たちの中で、それらの問題を檢證して論文にまとめる擔當者として、二〇一五年八月二十四～二十六日に中國國家圖書館藏本の原本を閲覽したことのある上原と荒木、卽ち本稿の著者二人に白羽の矢が立てられた。ところが、上原はその際には他の版本の調査を主目的としていたため、石渠閣補刻本はざっと書誌データを採った上でそれ以前にマイクロフィルムを見た際に寫りが不鮮明で判讀が困難だった箇所を幾つか確認したという程度で、全體の本格的な調査には及んでいなかった。一方、その際に石渠閣補刻本の詳細な調査を行い、それ以前にマイクロフィルムから一部分の複寫を入手してもいた荒木は、既に單著で「石渠閣出版活動和『水滸傳』之補刻」（『漢學研究』第三十五卷第三期、二〇一七）という關連論文も發表していたため適任かと思われたが、臺灣で非研究職に就いていたため、平田氏藏本の原本を閲覽調査するために京都を訪れることが困難な狀況にあった。そこで、まず荒木が二〇一五年八月の調査記錄と所有分の複寫とを上原に見せ、それと上原が撮影した平田氏藏本の寫眞とに基づいて、兩傳本の關係について二人で豫備的な檢討を行った。その時點で、荒木が中國國家圖書館藏本の複寫を所有していた箇所に關しては、平田氏藏本の第二冊以降は中國國家圖書館藏本と例外なく同版であることが確かめられた。その後、複寫未入手の箇所も含めた全容を把握するべく、上原が二〇一八年十月二十三～二十六日に中國國家圖書館藏本の原本の閲覽調査を再び行い、その上で得られた知見を論文にまとめ

ることになった。なお、上原が再度の調査に行く直前の二〇一八年十月中旬になって、中國國家圖書館ウェブサイト内の「中華古籍資源庫」（http://mylib.nlc.cn/web/guest/shanbenjiaojuan）において中國國家圖書館藏本の全葉の畫像が突如として公開された③ため、それ以降は二人とも適宜その畫像も參照している。執筆に當たっては、上原の書いた草稿に荒木が目を通して修正意見を出し、それを踏まえて上原が最終的にまとめるという手順を執った。本稿が上原と荒木の共著論文となっているのは、以上のような經緯によるものである。

一　中國國家圖書館藏本の書誌情報

中國國家圖書館藏『忠義水滸傳』百卷百回は、請求記號一〇七八七、四函二十八册（各函七册）、新補藍色表紙二五.九×一七.一cm、各册前表紙右肩絲外に册次を朱書、金鑲玉裝、原紙高二二.四cm、原紙は竹紙、天地裁斷あり、册により少しく蟲損あり。序首と大尾に陽刻正方「北京／圖書／館藏」を捺すが、その二箇所以外に藏書印は見えない。各册前副一或二葉、後副一葉。第一册は前から順に封面、「水滸傳叙」六葉、「忠義水滸傳目録」九葉、「水滸傳像」四十八葉九十六幅を收める。第二册は「忠義水滸傳引首」三葉に續いて卷一第一回が置かれ、以下數卷ごとに册を變えながら、第二十八册の卷一百第一百回まで續く。各卷一回で、本文は計千二百八十九葉。以上の範圍には、蟲損を受けたり部分的に破損していたりする葉が若干ありはするものの、缺葉や鈔補葉は全く無い。料紙は均質なので、別本による補配も皆無だと認められる。

前付のうち、封面・「水滸傳叙」・「水滸傳像」についてはそれぞれ章を改めて詳述する。

「忠義水滸傳目録」は半葉十二行二十四字で、行款・版式・字樣のいずれも後述の本文のそれに等しい。各回について「（低二格）卷一第一**回**／（低三格）張天師祈禱瘟疫（隔三格）洪太尉誤走妖魔」という形式で、回目下句の第一字の高さが揃うように隔格の數を調節している。第九葉表第九行で第百回の回目が終わり、その後版心まで空行が續くが、裏は版心の一部と第一・二行の上方のみを殘して

破り去られており、第九葉裏に目末題が刻されていたか否かは確認不能となっている。

「忠義水滸傳引首」と本文は目録と同版式で、左右雙邊、有界（ごく稀に無界）、白口、單黑魚尾（ごく稀に單白魚尾）、半葉十二行二十四字、卷一首の內匡郭一九．七×一三．一cm、楷書寫刻體。版心は「（低五格）（一格にて魚尾）水滸傳卷之幾（隔四～六格）丁付（横線、ごく稀に横線なし）」が基本で、丁付は卷ごとに改める。そして、版心下方の横線より下に「石渠／閣補」、「康熙五年／石渠閣補」、「〇」、「（その葉の字數）」のいずれかが刻されている場合がある。このうち、字數が刻されているのは卷六第九葉裏に「五百廿七」、卷四十三第十一葉表に「五百七十六」、卷五十一第五葉裏に「五百七十六」、卷九十七第十二葉表に「五百四四」の計四葉のみだが、いずれもその葉の表裏に刻された正確な字數である。殘る「石渠／閣補」と「康熙五年／石渠閣補」と「〇」の三種はいずれも補刻葉であることを示す標識であり、それぞれの詳細は章を改めて述べる。

卷一第一葉表第一～五行を「忠義水滸傳卷之一／（低三格）（以下の五字とその間の空格を合わせて占八格にて第二・三行の中心に）李卓吾評閲（隔二格）（以下毎字隔一格にて）施耐菴集撰　／（「李卓吾評閲」を前行と共有）（隔二格）（以下毎字隔一格にて）羅貫中纂修　／第一回／（低三格）張天師祈禱瘟疫（隔三格）洪太尉誤走妖魔」としており、以下本文に入る（圖1）。引首および卷二以降の各卷の第一～五行もこれに準じるが、第二・三行の中間の

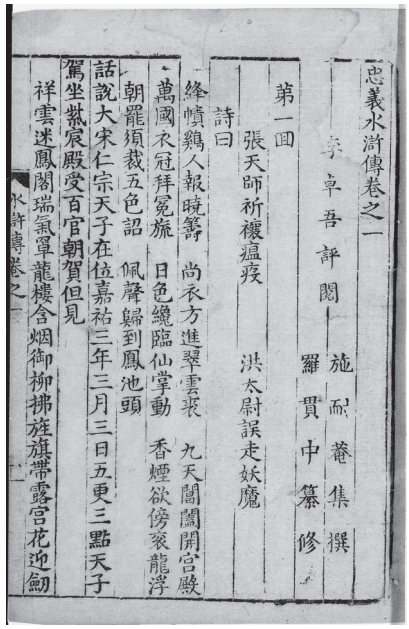

忠義水滸傳卷之一
李卓吾評閲　施耐菴集撰
羅貫中纂修
第一回
張天師祈禳瘟疫　洪太尉誤走妖魔
詩曰
一縷幟鷄人報曉籌　尚衣方進翠雲裘　九天閶闔開宮殿
萬國衣冠拜冕旒　日色纔臨仙掌動　香煙欲傍衮龍浮
朝罷須裁五色詔　佩聲歸到鳳池頭
話說大宋仁宗天子在位嘉祐三年三月三日五更三點天子駕坐紫宸殿受百官朝賀但見
祥雲迷鳳閣瑞氣罩龍樓含烟御柳拂旌旗帶露宮花迎劒
水滸傳卷之一

圖1　中國國家圖書館藏本卷一第一葉表

上方に「李 卓 吾 評 閲」の文字が見えるのは、引首・巻一～十・二十二・四十三・六十二・八十二の計十五箇所のみ。五四排印本以下多くの先行研究で指摘されている通り、「李 卓 吾 評 閲」の五文字は十五箇所いずれも他の文字と字様が異なっており、後から埋木によって追加したものと認められる。

巻の末葉が裏面第十二行（末行）まで殘っている場合は、例外なくその行に「忠義水滸傳卷之幾」という尾題が刻されている。しかし、その行まで料紙が殘っているのは、いずれもその右隣の行まで本文が續いている巻三・四・十二・十三・二十・六十八・八十四・九十六・九十九・一百のみである。上記以外の計九十巻と引首の各末葉は、本文が終わる行のすぐ左で料紙が切り取られているか、本文が終わった行から數行を空けたところで料紙が切り取られているか、本文が葉の表で終わった場合に版心まで或いは裏の第一行か第二行までを殘したところで料紙が切り取られているか、それとも本文が終わる行自體がその行の文字の右側の一部だけを殘して切り取られてしまっているか、のいずれかとなっている。右のどの場合も、料紙が殘っている範圍には字の無い行でも界線が刷られているので、本文がどの行で終わったかに關わらず、その葉の裏面の第十二行まで空行を續けて第十二行に「忠義水滸傳卷之幾」という尾題を彫る形で統一されていたようである。

五四排印本以來多くの先行研究で指摘されている通り、版心に前述の三種の補刻標識のいずれかがある葉以外にも全體が補刻だと思われる葉があり、その他に原刻の版木の一部と補刻の版木とを接ぎ足して刷られている葉も存在する。それらの詳細については後の章で述べる。また、原刻と思しき葉の中には、漫漶が進んでいる葉が散見される。

二　平田氏藏本の書誌情報

平田昌司氏藏『忠義水滸傳』百巻百回は、二帙十二冊（各帙六冊）、藍色の各帙表の左肩に白紙書題簽「水滸傳 某帙」（某は上下）を貼付、後補薄茶色表紙二三．七×一五．五cm、各冊前表紙左肩より「水滸傳（隔約五格）幾」（幾は冊次、第九冊の「九」は「三」ないし「五」の上に太字で重ね書

きする）と朱書、第五・六・八・九・十二冊では左肩よりの冊次朱書の隣に「幾至／幾」（幾はいずれも巻次）と墨書、下小口に毎字改行にて「水　滸　傳　幾」（幾は冊次）と墨書、康熙六針眼訂、竹紙（第一冊のみ楮紙）、天地裁斷あり、冊により僅かに蟲損あり。間々朱筆或いは墨筆にて補筆・句讀・圈點・傍線・訓點・送假名・校勘・音注・義注等の書き入れあり。藏書印はどこにも見えない。[4] 藏書票の剝離痕や請求記號の書き入れなどといった圖書館に所藏されていた痕跡は全く見出せないので、入札會への出品以前も個人の所藏であったものと思われる。[5]

第一冊には前から順に「讀忠義水滸傳序」三葉、「李卓吾先生批點忠義水滸傳目録」二葉、「李卓吾先生批點忠義水滸傳引首」四葉と、不分巻の本文第一～二回の計三十九葉とを收めるが、これらの全葉が享保十三年林九兵衛和刻本『李卓吾先生批點忠義水滸傳』（東京大學總合圖書館等藏。第十回末に「享保戊申（十三年）孟春望日／　京師書坊　林九兵衛」の刊記を持つ）[6] と同版である。よって、第一冊は第二冊以降の石渠閣補刻本の缺巻部分を和刻本で補ったものと認められる。表紙は第二冊以降と同質のものが附されており、全十二冊のいずれもが天地の裁斷を受けて同じ大きさに揃えられている。

第二冊以降が石渠閣補刻本で、巻三から巻一百までの九十八巻分の本文計千二百五十八葉が、部分的な破損や蟲損や鈔補を蒙る葉が若干あるものの、缺葉も全面的な鈔補葉もなく揃っている。第二冊以降の料紙はどの葉でも均質であり、第一冊以外には補配は無いと認められる。

第二冊以降の千二百五十八葉のうち、巻十五第一・二葉と巻八十二第十三葉の計三葉が中國國家圖書館藏本と異版であるのを例外として、その他の計千二百五十五葉は全て中國國家圖書館藏本と同版である。異版の三葉はいずれも中國國家圖書館藏本では版心に「〇」が刻されている葉であり、かつ版心に「〇」が刻されているのは兩傳本を通じて中國國家圖書館藏本の上記三葉のみである。この三葉の詳細については次章で述べる。

基本的に同版である以上當然ながら、版式は中國國家圖書館藏本に同じで、巻三首の内匡郭は一九．九×一三．〇

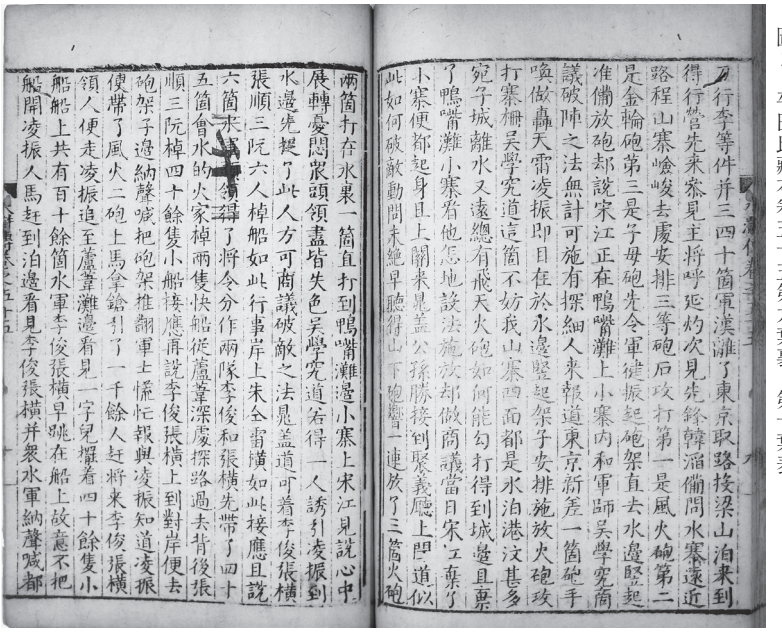
cm。各巻首第一～三行の記載は、「李卓吾評閲」の有無を含めて、全ての巻において中國國家圖書館藏本と完全に一致する。版心下方の記載の有無、及びそれがある場合に刻されている文字や記號も、同版の計千二百五十五葉に關しては、印刷不良や料紙の缺損によって平田氏藏本の版心下方の記載の有無自體が確認出來ない葉が三葉あるのを⑦除けば、全て中國國家圖書館藏本と同じである。更に、原刻の版木の一部と補刻の版木とを接ぎ足している葉の數や、それに該當する個々の葉の接ぎ足しの狀態も、中國國家圖書館藏本と變わらない。原刻部分に漫漶が散見される點も同じだが、その比率や進行度合については後述する。

各巻末葉は尾題より手前で料紙が切り取られていることが多いが、中國國家圖書館藏本よりは高い頻度で尾題まで殘っており、巻三・四・五・六・七・九・十二・十三・十八・二十・三十一・三十二・四十三・四十五・四十六（但し文字の右端だけを殘して破損）・四十八・五十六・五十九・六十・六十四・六十五・六十八・七十・七十一・七十二・七十四・七十六・八十・八十二・八十三・八十四・九十・九十四・九十五・九十六・九十八・九十九・一百の各末葉裏第十二行に「忠義水滸傳卷之幾」が確認出來る。

三　中國國家圖書館藏本と平田氏藏本の先後關係

兩者の同版の葉同士を比べると、版木の狀態にそれほど變化が無い葉が多いが、仔細に見ると中國國家圖書館藏本の方が幾らか漫漶が進行している葉⑧や、平田氏藏本ではまだ小さい版木の横割れが中國國家圖書館藏本で廣がっている葉⑨が散見される。そして、平田氏藏本には見えない版木の横割れが中國國家圖書館藏本にははっきり確認出來る葉⑩や、平田氏藏本では缺けていない版木の一部分が中國國家圖書館藏本では缺損している葉⑪も、それぞれごく稀にだが認められる。

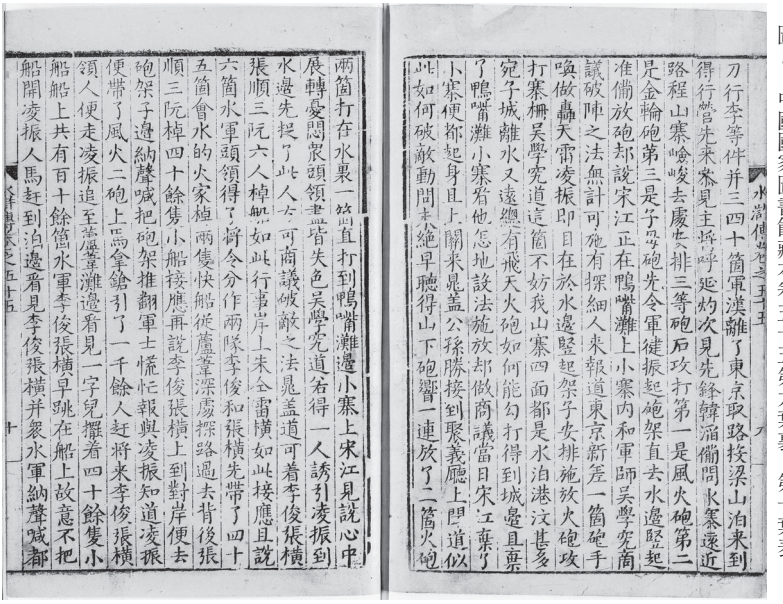
一例として、兩者の巻五十五第九葉裏と第十葉表の見開きを比較してみよう（圖2・3）。第九葉裏の左匡郭や第十葉表の右匡郭の缺ける位置が兩者で一致しているほか、第十葉表第一行第四格の「在」字を貫いて左に延びる細い横割れが（やや不明瞭だが）圖2にも圖3にも見えるので、兩



刀行李等件并三四十箇軍漢離了東京取路接梁山泊來到
得行營先來察見主將呼延灼次見先鋒韓滔備問水寨遠近
路程山寨嶮峻去處安排三等砲石攻打第一是風火砲第二
是金輪砲第三是子母砲先令軍徒振起砲架直去水邊竪起
准備放砲却說宋江正在鴨嘴灘上小寨內和軍師吳學究商
議破陣之法無計可施有探細人來報道東京新差一箇砲手
喚做轟天雷凌振即目在於水邊竪起架子安排施放火砲攻
打寨柵吳學究道這箇不妨我山寨四面都是水泊港汊甚多
宛子城離水又遠總有飛天火砲如何能勾打得到城邊且棄
了鴨嘴灘小寨省他怎地設法施放却做商議當日宋江棄了
小寨便都起身且上關來晁蓋公孫勝接到聚義廳上呼道似
此如何破敵動問未絕早聽得山下砲響一連放了三箇火砲

兩箇打在水裏一箇直打到鴨嘴灘邊小寨上宋江見說心中
展轉憂悶衆頭領盡皆失色吳學究道若得一人誘引凌振到
水邊先捉了此人方可商議破敵之法晁蓋道可着李俊張橫
張順三阮六人棹船如此行事岸上朱仝雷横如此接應且說
六箇水軍頭領得了將令分作兩隊李俊和張橫先帶了四十
五箇會水的火家棹兩隻快船從蘆葦深處探路過去背後張
順三阮棹四十餘隻小船接應再說李俊張橫上到對岸便去
砲架子邊納聲喊把砲架推翻軍士慌忙報與凌振知道凌振
便帶了風火二砲上馬拿鎗引了一千餘人赶將來李俊張橫
領人便走凌振追至蘆葦灘邊看見一字兒擺着四十餘隻小
船船上共有百十餘箇水軍李俊張橫早跳在船上故意不把
船開凌振人馬赶到泊邊看見李俊張橫并衆水軍納聲喊都

圖2　平田氏藏本卷五十五第九葉裏・第十葉表



刀行李等件并三四十箇軍漢離了東京取路接梁山泊來到
得行營先來察見主將呼延灼次見先鋒韓滔備問水寨遠近
路程山寨嶮峻去處安排三等砲石攻打第一是風火砲第二
是金輪砲第三是子母砲先令軍徒振起砲架直去水邊竪起
准備放砲却說宋江正在鴨嘴灘上小寨內和軍師吳學究商
議破陣之法無計可施有探細人來報道東京新差一箇砲手
喚做轟天雷凌振即目在於水邊竪起架子安排施放火砲攻
打寨柵吳學究道這箇不妨我山寨四面都是水泊港汊甚多
宛子城離水又遠總有飛天火砲如何能勾打得到城邊且棄
了鴨嘴灘小寨省他怎地設法施放却做商議當日宋江棄了
小寨便都起身且上關來晁蓋公孫勝接到聚義廳上呼道似
此如何破敵動問未絕早聽得山下砲響一連放了二箇火砲

兩箇打在水裏一箇直打到鴨嘴灘邊小寨上宋江見說心中
展轉憂悶衆頭領盡皆失色吳學究道若得一人誘引凌振到
水邊先捉了此人方可商議破敵之法晁蓋道可着李俊張橫
張順三阮六人棹船如此行事岸上朱仝雷横如此接應且說
六箇水軍頭領得了將令分作兩隊李俊和張橫先帶了四十
五箇會水的火家棹兩隻快船從蘆葦深處探路過去背後張
順三阮棹四十餘隻小船接應再說李俊張橫上到對岸便去
砲架子邊納聲喊把砲架推翻軍士慌忙報與凌振知道凌振
便帶了風火二砲上馬拿鎗引了一千餘人赶將來李俊張橫
領人便走凌振追至蘆葦灘邊看見一字兒擺着四十餘隻小
船船上共有百十餘箇水軍李俊張橫早跳在船上故意不把
船開凌振人馬赶到泊邊看見李俊張橫并衆水軍納聲喊都

圖3　中國國家圖書館藏本卷五十五第九葉裏・第十葉表

者が同版なのは明らかである。だが、圖3に非常にはっきりと見える第九葉裏第十二行第八格「末」字を貫いて右へ伸びる長い横割れと、同じく第十葉表第一行第八格「箇」の字を貫いて左に伸びる長い横割れとは、圖2では影も形も見えない。つまり、この葉は平田氏藏本の方が刷りが早く、中國國家圖書館藏本の方が刷りが遅いのである。なお、圖3の右記の二つの横割れは左右對稱を成しているので、この二葉が一枚の版木の表裏に上下を揃えて彫られていたことが分かる。

上原が中國國家圖書館藏本の原本と平田氏藏本の寫眞とを竝べて全葉を一通り比較したところ、漫漶も横割れも版木の一部の缺損も、これとは逆に中國國家圖書館藏本の方が刷りが早いことを窺わせる事例は絶無であった。從って、兩者が同版の葉は例外なく平田氏藏本の方が中國國家圖書館藏本よりも刷りが早いと認められる。

但し、平田氏藏本には刷りにムラがある葉が散見され、そうした葉ではごく一部の文字の印刷が妙に濃い一方で、逆に印刷が薄く讀み辛い狀態になっている文字が少なからず見られる。中國國家圖書館藏本にも平田氏藏本と同じ文字が濃く出る刷りムラが間々認められるので、この刷りムラは版木に反りが生じるなり部分的な埋木改刻を受けるなりして版面の高さが不均一になったことに起因しているのであろう。刷りムラの有無に關わらず中國國家圖書館藏本は全體的に平田氏藏本よりも濃く刷られており[12]、平田氏藏本では薄くて讀み辛い文字がはっきりと讀める場合もある。破損や蟲損で讀めない文字も互いに補い合えるので、兩傳本を對照出來るようになったことの意義は大きい。

前章で述べた兩者が例外的に異版である三葉は、いずれも平田氏藏本では原刻と思われる些か漫漶が進んだ葉であるのに對して、中國國家圖書館藏本は版心下方に「〇」を刻した補刻葉となっている（圖4・5）。圖4は第七～十二行の第九～十九格邊りの文字に漫漶が見られ、第十・十一行の第十～十七格の文字の多くは刷りの惡い筆畫を墨筆でなぞる補筆[13]が舊藏者の手によって施されている。平田氏藏本の印刷後にこの漫漶が更に進んで判讀が困難になったために、補刻が行われて圖5の形になったのであろう。

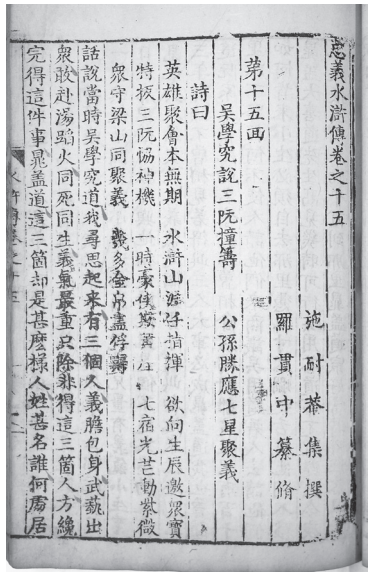

忠義水滸傳卷之十五
施耐菴集撰
羅貫中纂脩
第十五回
吳學究說三阮撞籌　公孫勝應七星聚義
詩曰
英雄聚會本無期　水滸山涯任指揮　欲向生辰邀衆賓
特扳三阮協神機　一時豪傑皆黃屋　七宿光芒動紫微
衆守梁山同聚義　幾多金帛盡俘歸
話說當時吳學究道我尋思起來有三個人義膽包身武藝出
衆敢赴湯蹈火同死同生義氣最重只除非得這三箇人方纔
完得這件事晁蓋道這三箇却是甚麽樣人姓甚名誰何處居

圖4　平田氏藏本卷十五第一葉表

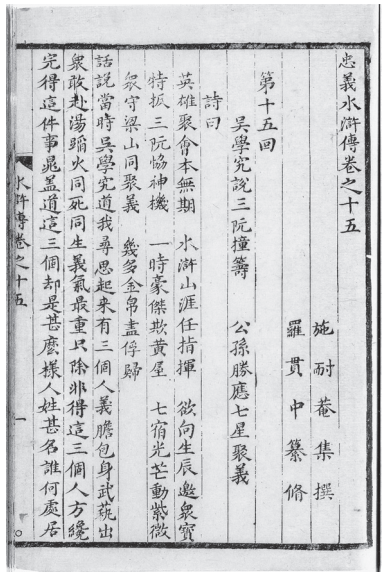

忠義水滸傳卷之十五
施耐菴集撰
羅貫中纂脩
第十五回
吳學究說三阮撞籌　公孫勝應七星聚義
詩曰
英雄聚會本無期　水滸山涯任指揮　欲向生辰邀衆賓
特扳三阮協神機　一時豪傑皆黃屋　七宿光芒動紫微
衆守梁山同聚義　幾多金帛盡俘歸
話說當時吳學究道我尋思起來有三個人義膽包身武藝出
衆敢赴湯蹈火同死同生義氣最重只除非得這三個人方纔
完得這件事晁蓋道這三個却是甚麽樣人姓甚名誰何處居

圖5　中國國家圖書館藏本卷十五第一葉表

なお、平田氏藏本の卷十五第二葉は左右の匡郭の缺ける位置が同第一葉と左右對稱になっているため、同じ一枚の版木の表裏に彫られていたものと認められる。つまり、中國國家圖書館藏本の印刷に至るまでに、版木一枚が兩面とも補刻に置き換えられたという譯だ。そもそも、この版本は全體を通して原則として各卷ごとに第一・二葉、第三・四葉、第五・六葉……と隣り合う葉同士が前から順に一枚の版木の裏表に上下を揃えて彫られており、卷全體の葉數が奇數の場合には、その卷の末葉を彫った版木は片面しか使われていない。しかし、もう一箇所の「〇」印の補刻葉である卷八十二第十三葉については、平田氏藏本の時點で版木の片面しか使われていなかったらしい。卷八十二は全十五葉なので、順番通りなら第十三葉は第十四葉と同じ版木の表裏に彫られるはずなのだが、第十四葉に見える横割れは明らかに第十五葉の横割れと左右對稱を成している。第十一葉と第十二葉にも左右對稱の横割れが見えるので、

どうやら原則に反して第十四葉と第十五葉を一枚の版木の表裏に彫ってしまい、その代わりに第十三葉の彫られた版木が片面のみの使用となっていたようだ。[14]

前章でも述べた通り、「〇」印の補刻葉は中國國家圖書館藏本の全體を通して右の三葉しかなく、平田氏藏本には一葉も存在しない。また、これも前述の如く、中國國家圖書館藏本のこれ以外の種類の補刻葉は、版木全體の差し替えか版木の一部のみの補修なのかを問わず、平田氏藏本でも既に中國國家圖書館藏本と同版の補刻葉になっている。つまり、中國國家圖書館藏本の「〇」印の補刻葉は、平田氏藏本の印刷時にはまだ施されていなかった補刻によるものであり、それは中國國家圖書館藏本に見える數段階の補刻の中で最も遅くに施されたものであったことが分かる。

四　補刻葉の種類と分布

前述の通り、「〇」印の補刻葉以外にも、版心下方に「石渠／閣補」とある補刻葉、同じく「康熙五年／石渠閣補」となっている補刻葉、どの補刻標識も見えないが字様や版式から補刻と思われる葉、原刻の版木の一部と補刻の版木とを接ぎ足して刷られている葉が存在することが、中國國家圖書館藏本についての五四排印本以來の先行研究で指摘されて來た。しかし、具體的にどの葉がそれに當たると判斷したのかを全て明示した先行研究は、管見の限りでは五四排印本の校勘記しかない。それ以外の先行研究では、馬蹄疾前掲書が「書口底間刻有「康熙五年石渠閣補」八字者共計二十五頁、只存「石渠閣補」四字（「康熙五年」挖去者）二百三十七頁。[15]全書總計補刻者二百六十二頁」（七一頁）、馬幼垣前掲書が「四字題識二百三十九次、八字題識十七次（包括上面所説被挖去題識的兩葉）」（一〇七頁）、「這類無題識補刊葉子共五十五葉」（同前）、「零星補刊共涉及二百零二行」（一〇八頁）、荒木前掲論文が「版心底下刻有「石渠閣補」的有二百三十七葉・「康熙五年石渠閣補」的有十五葉・刻有圈子標誌的補刻葉有三葉。亦有一些雖無補刻標誌而字體與其他部分顯然不同的十一葉。此外、筆者懷疑爲補刻葉的還有若干」（二一八頁）[16]と、基本的に各種の補刻を何葉ずつ認めたかという數字のみを擧げている。[17]

五四排印本の校勘記は各回の終わりに分散して附されているので全體で補刻葉がどのくらいあるのかを把握するには不便だし、補刻と認めた葉數だけを擧げている先行研究の間では、互いに數字に若干の差が見られる。そこで、上原の二〇一八年十月の中國國家圖書館藏本の原本閲覽時には、中國國家圖書館藏本のうち十二行二十四字の版式を採る全ての葉――卽ち目錄・引首・卷一～一百の本文の計千三百一葉――について、平田氏藏本の寫眞（卷三～一百の本文計千二百五十八葉）とも對照しながら、どの補刻段階に分類すべきかを調査した。なお、豫斷を排するため、五四排印本でどの葉が補刻として言及されているかの詳細は、その調査の前には敢えて確認しなかった。

その結果、標識は無いが版木の一部が補刻と思しき葉や、原刻の版木の一部と補刻の版木とを接ぎ足して刷られている葉は確かに散見された。上原はそれぞれを細かい特徵によって更に三種ずつに區分し、計千三百一葉の一々を、以下のA～Kの十一種類（但し、Kには更なる下位區分を設けた）のいずれかに分類した。なお、以下の分類結果は、E以外は平田氏藏本も中國國家圖書館藏本と變わらない。

A：原刻と思しき葉。

B：版心下方に「石渠／閣補」とある葉。

C：版心下方に「康熙五年／石渠閣補」とある葉。

D：版心下方が「（四字削去）／（左端のみ殘して削去）石渠閣補」となっている葉。Cと特徵が一致し、かつ同じ回にCが四葉あるので、「康熙五年／石渠閣補」が削られたものと思しい。なお、これに分類した二葉の他には、版心下方から文字が削り去られた痕跡が認められる葉は、中國國家圖書館藏本にも平田氏藏本にも一葉も無かった。

E：中國國家圖書館藏本のみ版心下方に「〇」とある葉。前述の通り、全て平田氏藏本ではAである。

F：版木が縱に眞っ二つになり、それを接ぎ直して刷られた葉。例外なしに片方の全體が補刻で、補刻の標識は版心をはじめどこにも無い。

G：版木が完全に縱に眞っ二つにされているわけではないが、一部分が取り去られて補刻に變わってい

る葉。補刻の標識は版心をはじめどこにも無い。必ず隣り合う二葉一組で出現するので、どの組も同じ版木の表裏に刷られたものと考えられる。

H：版木が横に眞っ二つになり、それを接ぎ直して刷られた葉。片方の全てまたは一部が補刻と思われる箇所が散見されるが、補刻を含まないように見える葉も多く、補刻を含むか否かの判断は難しかった。そのため、補刻を含むように見えるか否かに關わらず、横に二つに割れた版木を接ぎ直して刷られている葉は全てHに分類した。補刻の標識は版心をはじめどこにも無い。

I：補刻の標識は版心をはじめどこにも無いが、Aとは明らかに違う字様の無界の葉で、百卷百回本系統の本文をもつもの。

J：補刻の標識は版心をはじめどこにも無いが、Aとは明らかに違う字様の無界の葉で、百二十回本系統の本文を持つもの。

K：B～Jまでのどれにも該當せず、補刻の標識は版心をはじめどこにも無いが、Aとは字様が異なり、匡郭がAよりも太い有界の葉。版心下方に「石渠／閣補」と見えないことを除けばBと特徴が一致するものと、Bとも異なるように見えるものとがある。そこで、前者をKb、後者を單にKとする下位區分を設けた。

全千三百一葉のそれぞれが、以上の十一種類のうちどれに該當するかを表1に示す。それによってそれぞれの葉數を數えると、Aが八百九十五葉、Bが二百三十七葉、Cが十五葉、Dが二葉、Eが三葉、Fが四十六葉、Gが六葉、Hが四十四葉、Iが二葉、Jが二葉、Kが四十九葉（そのうちKbが十九葉）である。

確實な指標のあるB・C・Eの數は、全て荒木前掲論文と一致している。また、調査後に確認したところ、五四排印本で補刻だと言及されている葉は、表1でも全てその言及と同じ分類となっていた（但し、五四排印本はIとKとKbとを區別はしていない）。

その一方で、表1でAとH以外に分類したもののうち、

表１（１/５ページ）

目録	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	A
6	A
7	Kb
8	Kb
9	Kb
引首	
1	A
2	A
3	A
卷１	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
卷２	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
16	A

卷２	
17	C
18	C
19	C
20	C
21	A
卷３	
1	B
2	B
3	Kb
4	Kb
5	B
6	B
7	B
8	B
9	B
10	B
11	A
12	A
卷４	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	H
6	H
7	A
8	A
9	H
10	H
11	B
12	B
13	Kb
14	Kb
15	A
16	A
17	B
卷５	
1	A
2	A
3	A
4	A

卷５	
5	I
6	I
7	B
8	B
9	A
10	A
11	H
12	H
卷６	
1	B
2	B
3	B
4	B
5	F
6	F
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
卷７	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	A
6	A
7	H
8	H
9	B
10	B
11	B
卷８	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	K
6	K
7	A

卷８	
8	A
9	A
卷９	
1	A
2	A
3	H
4	H
5	A
6	A
7	A
8	A
9	H
10	H
11	A
12	A
卷10	
1	F
2	F
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
卷11	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	A
8	A
9	C
10	C
11	A
卷12	
1	F
2	F

卷12	
3	B
4	A
5	A
6	B
7	A
8	A
9	B
卷13	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
卷14	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	B
8	B
9	K
10	K
卷15	
1	E
2	E
3	B
4	B
5	F
6	F
7	B
8	B
9	B
10	B
11	B

卷15	
12	Kb
卷16	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	F
8	F
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷17	
1	A
2	A
3	K
4	K
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	K
14	K
卷18	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	B

卷18	
11	A
12	A
卷19	
1	Kb
2	Kb
3	H
4	H
5	B
6	B
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	A
卷20	
1	Kb
2	Kb
3	B
4	B
5	Kb
6	Kb
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
卷21	
1	C
2	C
3	A
4	A
5	Kb
6	Kb
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A

表１（２/５ページ）

巻21	
13	B
14	B
15	B
16	B
17	A
巻22	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
巻23	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	B
6	Kb
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	Kb
巻24	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A

巻24	
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
16	A
17	A
18	A
19	A
20	A
21	F
22	F
23	B
24	B
25	A
26	A
27	A
28	A
29	A
巻25	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	Kb
9	A
10	A
巻26	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A

巻26	
11	B
12	B
13	A
14	A
15	A
巻27	
1	B
2	B
3	F
4	F
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
巻28	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
巻29	
1	B
2	B
3	K
4	K
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
巻30	
1	B
2	B
3	A
4	A

巻30	
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	F
13	F
巻31	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	B
9	B
10	B
11	B
12	B
13	A
巻32	
1	A
2	A
3	K
4	K
5	A
6	A
7	B
8	B
9	B
10	B
11	B
12	B
13	B
14	B
15	B
16	B
17	A

巻33	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
11	B
12	B
巻34	
1	F
2	F
3	H
4	H
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	A
巻35	
1	A
2	A
3	K
4	K
5	B
6	B
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	A
14	A

巻36	
1	B
2	B
3	B
4	B
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
巻37	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	C
11	A
12	A
13	A
14	A
巻38	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	B
9	A
10	A
11	H
12	H
13	A

巻38	
14	A
15	A
巻39	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	B
16	B
17	B
18	B
19	K
巻40	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
巻41	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A

表１（３／５ページ）

卷41	
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	C
14	C
15	A
16	A
卷42	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	F
8	F
9	H
10	H
11	B
12	B
13	A
卷43	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	K
16	K

卷44	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
卷45	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
16	A
17	A
卷46	
1	B
2	B
3	B
4	B
5	B
6	B
7	A

卷46	
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
卷47	
1	A
2	A
3	H
4	H
5	A
6	A
7	B
8	B
9	A
10	A
11	B
12	B
13	B
14	B
卷48	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	B
8	B
9	A
卷49	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	K
6	K
7	A
8	A
9	B
10	B

卷49	
11	A
12	A
13	A
14	A
卷50	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	H
6	H
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
卷51	
1	A
2	A
3	F
4	F
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷52	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	F
6	F
7	A
8	A
9	A
10	A

卷52	
11	A
12	A
卷53	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	B
14	B
15	K
16	K
卷54	
1	A
2	A
3	K
4	K
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
卷55	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	F
6	F
7	K
8	K

卷55	
9	A
10	A
11	A
卷56	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
卷57	
1	H
2	H
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷58	
1	A
2	A
3	B
4	A
5	B
6	A
7	H
8	H
9	A
10	A

卷58	
11	A
12	A
卷59	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	H
6	H
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
卷60	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	B
9	B
10	B
11	A
12	A
13	A
卷61	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A

表１（４／５ページ）

巻61	
12	A
13	B
14	B
15	K
巻62	
1	D
2	D
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	C
14	C
15	C
16	C
17	A
巻63	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	H
10	H
11	A
12	A
巻64	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A

巻64	
6	A
7	G
8	G
9	F
10	F
11	A
巻65	
1	A
2	A
3	F
4	F
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
巻66	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
巻67	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	B
6	B
7	H
8	H
9	A
10	A
11	F

巻67	
12	F
13	K
巻68	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	G
6	G
7	A
8	A
9	B
10	B
11	B
12	B
巻69	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
10	A
巻70	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
巻71	
1	A
2	A
3	F
4	F

巻71	
5	B
6	B
7	B
8	B
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
巻72	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	F
10	F
11	A
12	A
巻73	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	B
9	B
10	B
11	A
12	A
巻74	
1	A
2	A
3	A
4	A

巻74	
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
巻75	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
巻76	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	B
8	B
9	A
10	A
11	A
12	A
13	H
14	H
巻77	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A

巻77	
8	A
9	A
10	A
11	A
巻78	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
巻79	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	B
6	B
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
巻80	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A

巻80	
13	B
14	B
15	A
16	A
巻81	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
巻82	
1	A
2	A
3	F
4	F
5	A
6	A
7	F
8	F
9	A
10	A
11	A
12	A
13	E
14	A
15	A
巻83	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A

表１（５／５ページ）

卷83	
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷84	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	G
10	G
11	B
12	B
卷85	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
12	A
13	K
卷86	
1	A
2	A
3	B
4	B
5	B
6	B

卷86	
7	A
8	A
9	B
10	B
11	A
卷87	
1	H
2	H
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
卷88	
1	B
2	B
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	J
14	J
卷89	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	F
8	F
9	A

卷89	
10	A
11	A
12	A
卷90	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	H
8	H
9	B
10	B
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
卷91	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷92	
1	B
2	B
3	H
4	H
5	A
6	A
7	A

卷92	
8	A
9	A
10	A
11	F
12	F
卷93	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷94	
1	A
2	A
3	H
4	H
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
卷95	
1	B
2	B
3	B
4	B
5	A
6	A

卷95	
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	B
14	B
卷96	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
卷97	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
卷98	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A

卷98	
7	A
8	A
9	A
10	A
11	A
12	A
13	A
14	A
15	A
16	A
卷99	
1	A
2	A
3	A
4	A
5	A
6	A
7	A
8	A
9	K
10	K
11	A
12	A
13	F
14	F
15	A
16	A
17	A
18	A
19	A
卷100	
1	B
2	B
3	B
4	B
5	B
6	B
7	B
8	B
9	B
10	B

卷100	
11	B
12	B
13	B
14	B
15	A

五四排印本では補刻だとは言及されていない葉が計二十葉ある。その内譯は、Bが二葉（目錄第三・四葉）、Fが六葉（卷六第五・六葉、卷三十四第一葉、卷五十五第五葉、卷八十二第三・八葉）、Gが六葉（Gに分類したもの全て）、Kが六葉（Kbが目錄第七・八・九葉の計三葉、單なるKが卷十七第三・四葉と卷六十七第十三葉の計三葉）である。そのうちBの二葉とKbの三葉はいずれも五四排印本の校勘記に補刻葉についての言及自體が無い目錄における事例なので、五四排印本と上原とで補刻か否かの判斷が割れているのは、計十五葉ということになる。

FとGについては、上原が平田氏藏本と中國國家圖書館藏本の雙方を確認した上での判斷であり、上原の說明を受けた上で寫眞を確認した荒木も、言われてみればいずれもそのように見えると認めているので、表1の方が精度が高いはずである。なお、Fのうち卷六十四第九・十葉は、版木の原刻部分のみ上下に眞っ二つに割れているので、Hの要素も併せ持っている（但し、表1では煩を避けて單にFとしておいた）。

残るKは專ら主觀的な判斷による分類であるが、卷十七第三・四葉の二葉は上原もAにするかKにするか大いに迷った箇所であり、Aでもおかしくはない。卷六十七第十三葉は表第三行までしか文字がないのだが、上原の目にはAとは映らず、KにすべきかKbにすべきかで迷った末に、三行しかなく手掛かりが少ないことからKbと斷ずることは避けて單にKとしておいた箇所である。五四排印本は、もしかすると三行しかないことから補刻か否かの判斷自體を避けたのかもしれない。ともあれ、K（Kbを含む）に相當するものだと判斷した數が五四排印本と上原とで僅か三葉しか違わないということは、どちらも決して恣意的な分類をしている譯ではなく、それなりに共有されうる基準の下に分類されているのだというのは了解されよう。

五　補刻各種の特徵と施された順序

では、補刻各種それぞれの特徵を掘り下げてみよう。

まずBは、版心下方に「石渠／閣補」とあるほか、Aに比べるとほぼ例外なく匡郭が太めである。諸先行研究で言

われている通り、字様はAと全く一致するというほどではないが、意識してAに似せているようには思われる。但し、Bの中でも字様が均一だという譯ではなく、字様が見劣りする葉も若干ある。なお、本誌所載の小松謙「『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究」では、Bの補刻は字様をAに似せているだけではなく、本文の字句についても異體字レベルまで忠實に原刻葉のありさまを引き繼いでいる可能性が高いことが考證されている。Bの中には「李 卓 吾 評閲」の五文字が見える卷三・六・八の各第一葉が含まれているが、前述の通りその五文字は他の文字とは字様が異なっており、Aに九箇所見えるそれと同じく、埋木改刻によって追加されたものと認められる（圖6）。なお、前掲の馬蹄疾前掲書七一頁の引用箇所では、Bの「石渠／閣補」をCの「康熙五年／石渠閣補」から「康熙五年」を削った結果生じた形だと解釋しているように見える。しかし、「康熙五年／石渠閣補」から「康熙五年」を削ったとしても、改行の入った「石渠／閣補」にはなりようがないので、これは明らかに誤解である。

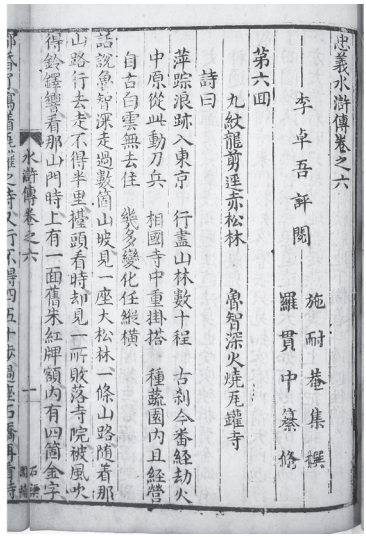

忠義水滸傳卷之六
李卓吾評閲　施耐菴集撰　羅貫中纂修
第六回
九紋龍剪逕赤松林　魯智深火燒瓦罐寺
詩曰
萍踪浪跡入東京　行盡山林數十程　古刹今番經劫火
中原從此動刀兵　相國寺中重掛搭　種蔬園内且經營
自古白雲無去住　幾多變化任縱横
話說魯智深走過數箇山坡見一座大松林一條山路隨着那
山路行去走不得半里襌頭看時却見一所敗落寺院被風吹
得鈴鐸響看那山門時上有一面舊朱紅牌額内有四箇金字

圖6　平田氏藏本卷六第一葉表～版心（寫眞合成）

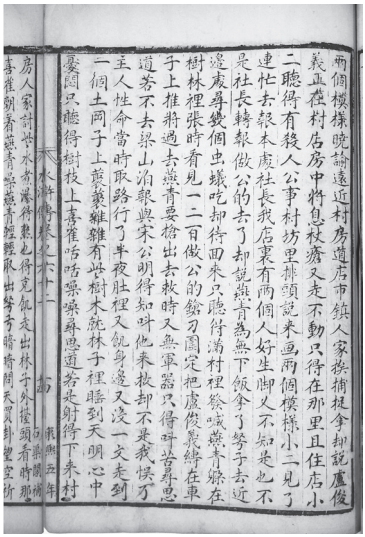

兩個模樣曉諭遠近村房道店市鎮人家挨捕捉拿却說盧俊
義並在村店房中將息杖瘡又走不動只得在那里且住店小
二聽得有後人公事村坊里排頭說來亘兩個模樣小二見了
連忙去報本處社長我店裏有兩個人好生脚又不知是也不
是社長轉報做公的去了却說燕青為無下飯拿了弩子去近
邊處尋雙個虫蟻吃却待回來只聽得滿村裡發喊燕青躲在
樹林裡張時看見一二百做公的鈎刀圍定把盧俊義縛在東
子上推將過去燕青要搶出去救時又無軍器只得叫苦事思
道苦不去梁山泊報與宋公明得知叫他來救却不是我悞了
主人性命當時取路行了半夜肚裡又飢身邊又沒一文走到
一個土岡子上蕨麥雜雜有些樹木就林子裡睡到天明心中
憂悶只聽得樹枝上喜雀呱呱噪噪尋思道若是射得下來村

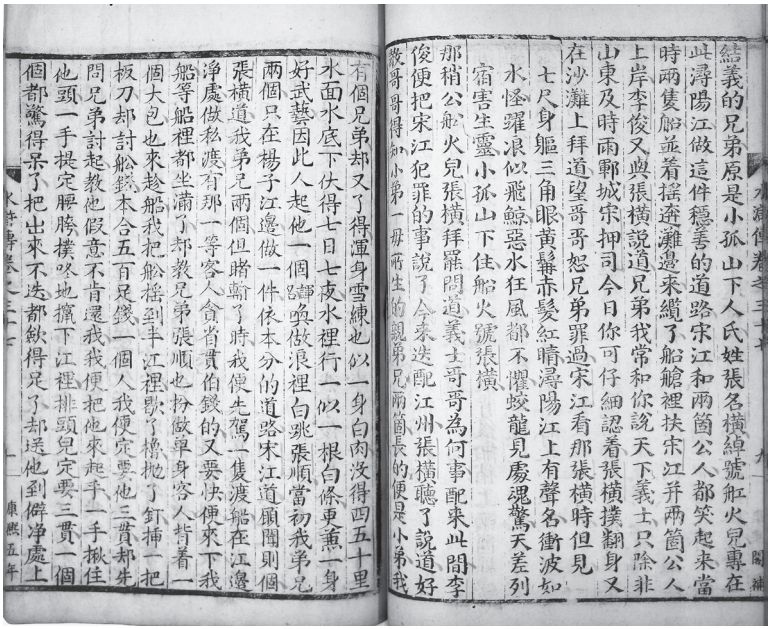
圖7　平田氏藏本卷六十二第十四葉表～版心（寫眞合成）

Dは前述の通りCと同じ康熙五年の石渠閣による補刻と認められるので、Cとまとめて特徴を論じる。CとDもまた、Aよりも匡郭が太めである。五四排印本はBと同じくAに字様を似せているとするが、荒木前掲論文ではAやBよりも筆畫が細めで縦長の字様だと指摘している。嚴密に言うと、Cの中でも字様の差が激しく、荒木前掲論文で指摘した特徴が良く出ている箇所（圖7）と、比較的Bに近い字様の箇所（圖8の左の葉。なお、右の葉はBなので比較されたい）がある。なお、Cのうち卷十一第九・十葉と卷四十一第十三・十四葉と卷六十二第十三～十六葉、及びDの二葉どちらもの計十葉は、十二行二十四字の範圍には他に全く見出せない白魚尾となっている（圖9）。Dの二葉のうち、卷六十二第二葉には比較的はっきりと「石渠閣補」の左端の削り漏らしが見えるが（圖10）、第一葉はそこだけを單獨で見ても文字の削り漏らしだと判斷するのは困難な程度にしか筆畫は殘っていない。圖9の大きさではそれを見つけるのも不可能だろう。Dの卷六十二第一葉には「李 卓 吾 評 閲」の五文字が見えるが、周圍の文字とは字様も大きさも少しく異なっており、やはり埋木改刻により追加されたものと見て良かろう（圖9）。

既に前章で述べた通り、Eの三葉だけは平田氏藏本と中國國家圖書館藏本が異版である。既に圖4・5を掲げたが、字様は平均的なBよりも上手く似せていると言えるほどである。補刻の性質をより深く知るため、以下に兩傳本間の文字の異同を細かい異體字の相違まで全て擧げてみよう。

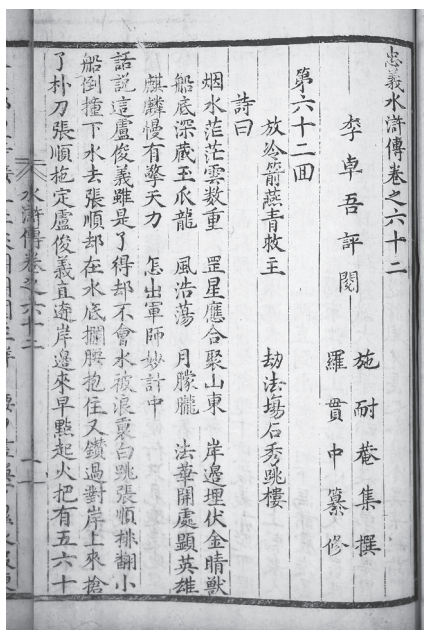
・卷十五第一葉……表八行：平「豪俠」／國「豪傑」、表十行：「**萩**」の字體が小異、表十二行：「處」の字體が小異、裏二・七（二箇所あり）・八行「曾」の字體が小異、裏十一行「高」の字體が小異、裏十二行「最」の字體が異なる

・卷十五第二葉……表一行：「曾」の字體が小異、表一・三行：「従」の字體が小異、表三行：「辭」の字體が異なる、表七・八行：「呉」の字體が異なる、表七行：「藏」の字體が小異、表十行：「遶」の略字の字體が小異、表十行：「處」の字體が小異、裏一行：「逕」の字體が小異、裏二行：「看」の字體が小異、裏三行



結義的兄弟原是小孤山下人氏姓張名横綽號舡火兒專在
此潯陽江做這件穩善的道路宋江和兩箇公人都笑起來當
時兩隻船並着搖遮灘邊來纔了船艙裡扶宋江并兩箇公人
上岸李俊又與張横說道兄弟我常和你說天下義士只除非
山東及時雨鄆城宋押司今日你可仔細認着張横撲翻身又
在沙灘上拜道望哥哥恕兄弟罪過宋江看那張横時但見
七尺身軀三角眼黄髯赤髮紅睛潯陽江上有聲名衝波如
水怪躍浪似飛鯨惡水狂風都不懼蛟龍見處魂驚天差列
宿害生靈小孤山下住船火虎張横
那稍公舡火兒張横拜罷問道義士哥哥為何事配來此間李
俊便把宋江犯罪的事說了合來送配江州張横聽了說道好
教哥哥得知小弟一册而生的親弟兩箇長的便是小弟我
有個兄弟却又了得渾身雪練也似一身白肉沒得四五十里
水面水底下伏得七日七夜水裡行一似一根白條更兼一身
好武藝因此人起他一個諢號做浪裡白跳張順當初我弟兄
兩個只在楊子江邊做一件依本分的道路宋江道願聞則個
張横道我弟兄兩個但睹薪了時我便先駕一隻渡船在江邊
淨處做私渡有那一等客人貪省貫伯錢的又要快便來下我
船等船裡都坐滿了却教兄弟張順也扮做單身客人背着一
個大包也來趁船我把船搖到半江裡歇了橹拋了釘椿一把
板刀却討船錢本合五百足錢一個人我便定要他三貫却先
問兄弟討起教他假意不肯還我我便把他來起手一手揪住
他頸一手提定腰膀撲咚地攧下江裡排頭兒定要三貫一個
個都驚得呆了把出來不迭都欽得足了却送他到僻淨處上

圖8　平田氏藏本卷三十七第九葉裏・第十葉表



忠義水滸傳卷之六十二

李卓吾評閱　施耐菴集撰
羅貫中纂修

第六十二回

放冷箭薛青救主　劫法場石秀跳樓

詩曰

烟水茫茫雲數重　罡星應合聚山東　岸邊埋伏金睛獸
船底深藏玉爪龍　風浩蕩　月朦朧　法華開處顯英雄
麟麟慢有擎天力　怎出軍師妙計中

話說這盧俊義雖是了得却不會水被浪裏白跳張順排翻小
船倒撞下水去張順却在水底攔腰抱住又鑽過對岸上來搶
了朴刀張順拖定盧俊義直遊岸邊來早點起火把有五六十

圖9　平田氏藏本卷六十二第一葉表～版心（寫眞合成）

圖10　平田氏藏本卷六十二第二葉裏版心下方

「網」の字體が小異、裏四行：「従」の字體が小異、裏五行：平「竪」／北「堅」、裏九行：平「喏」／國「咲」

・巻八十二第十三葉……表六行：平「欣喜」／國「欣喜」、表七行：平「遂令」／國「勅令」、表九行：「等」の字體が小異、裏四行：平「紫玉（玉の上半分消えかける）」／國「紫土」、裏六行「沼」の字體が小異、裏十一行：平「俳長」／北「俳畏」

一見それなりに異同がありそうに見えるが、殆どはごく細かい異體字の相違である。文字自體が違う例のうち、巻十五第二葉裏第五行の「竪」と「堅」、同第九行の「喏」と「咲」、巻八十二第十三葉表第六行の「欣」と「欣」、同裏第四行の「玉」と「土」、同第十一行の「長」と「畏」は、いずれも明らかに字形の類似による誤刻である。残るは巻第十五第一葉表第八行の「豪侠」と「豪傑」及び巻八十二第十三葉裏の「遂令」と「勅令」の二例のみだが、どちらも中國國家圖書館藏本の形でも意味は通るので、補刻の際に讀めなくなっていた文字を、意味を汲んで獨自に補ったのであろう。となると、字様の類似も併せて考えれば、「〇」印の補刻葉はいずれも、漫漶が進んだ原刻の版木で刷った葉を基本的に影鈔しつつ、漫漶のためにどうしても讀めなかった文字は字形や意味からの類推で補うという手順で作成されたものと思われる。つまり、版木を紛失したために補刻をしたのではなく、漫漶が進み過ぎて使用に堪えなくなったと判斷されたために補刻をしたということになろう。

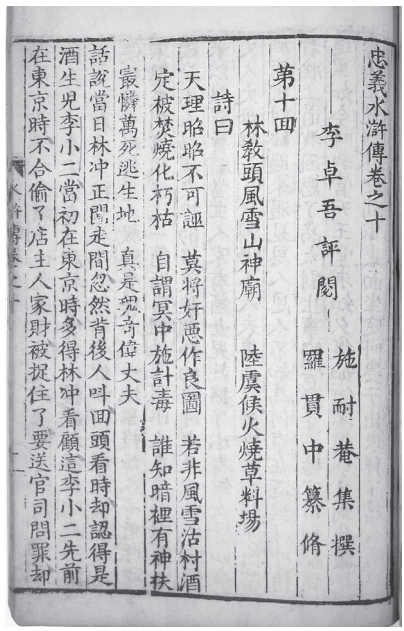
Fの計四十六葉では、原刻部分と補刻部分の繋ぎ目は、常に行間ないし版心のすぐ脇のどちらか、つまりいずれも文字の無い部分にある。版木が自然に割れたのなら文字の上に割れ目が入ることもあるはずだがそういう例は皆無だし、そもそも版木は木目の方向を揃えるので、自然に割れが入る際には縦向きではなく横向きに割れるものである。そして、この四十六葉は例外なく隣り合う二葉が一組となっており、一組をなす二葉の間では必ず補刻になっている行數が一致している。例えば、圖11は右の葉の後ろから八行分と、左の葉の前から八行分とが補刻である。これは前

了仙女托過仙棗又食了兩校共飲過三盃仙酒三枚仙棗宋江便覺道春色微醺又怕酒後醉失體面再拜道臣不勝酒量望乞娘娘免賜殿上法旨道既是星主不能飲酒可止教取那三卷天書賜與星主青衣去屏風背後玉盤內托出黃羅袋子包着三卷天書度與宋江宋江拜受看時可長五寸闊三寸厚三寸不敢開看再拜祗受藏於袖中娘娘法旨道宋星主傳汝三卷天書汝可替天行道為主全忠伏義為臣輔國安民去邪歸正他日功成果滿作為上御吾有四句天言汝當記取終身佩受勿忘於心勿泄於世宋江再拜恩受天言臣不敢輕泄於世人娘娘法旨道

遇宿重重喜　逢高不是凶　北幽南至睦　兩處見奇功

宋江聽畢再拜謹受娘娘法旨道玉帝因為星主魔心未斷道行未完暫罰下方不久重登紫府切不可分毫失忘若是他日罪下酆都吾亦不能救汝此三卷之書可以善觀熟視只與天機星同觀其他皆不可見功成之後便可焚之勿留在世所囑之言汝當記取目今天凡相隔難以久留汝當速回便令童子急送星主回去他日瓊樓金闕再當重會宋江便謝了娘娘跟隨青衣女童下得殿庭來出得福星門送至石橋邊青衣道恰纔星主受驚不是娘娘護祐已被擒拏天明時自然脫離了[illegible]星主看石橋下水裏二龍相戲宋江凭欄看時果見二龍戲水二青衣望下一推宋江大叫一聲却撞在神廚內覺來乃是南柯一夢宋江扒將起來看時月影正午料是三更時分宋江把袖子裡摸時手內棗核三箇袖裏帕子包着天書摸將出來看時果是三卷天書又只覺口裏酒香宋江想道這一夢真

圖11　平田氏藏本卷四十二第七葉裏・第八葉表



忠義水滸傳卷之十

李卓吾評閱　施耐菴集撰　羅貫中纂脩

第十回

林教頭風雪山神廟　陸虞侯火燒草料場

詩曰

天理昭昭不可誣　莫將奸惡作良圖　若非風雪沽村酒
定被焚燒化朽枯　自謂冥中施計毒　誰知暗裡有神扶
寰憐萬死逃生地　真是瑰奇偉丈夫

話說當日林冲正閒走間忽然背後人叫田頭看時却認得是酒生兒李小二當初在東京時多得林冲看顧這李小二先前在東京時不合偷了店主人家財被捉住了要送官司問罪却

圖12　平田氏藏本卷十第一葉表

述の通り原則として隣り合う二葉が一枚の版木の表裏に上下を揃えて彫られていたために相違ない。[18] ということは、Fの補刻は版木が自然に縦に割れてしまった箇所に施されたのではなく、版木を行と行の間で故意に縦に切斷して、その片側を補刻に變えたものと判斷される。おそらく、版木の表面から見た際の右側なり左側なりのどちらか一方だけに偏って漫漶が生じていた場合に採られた處置なのであ

ろう。Fの補刻行の字様は全體的にBに似ているので、Bと近い時期（同時でもおかしくない）の處置だったのではあるまいか。なお、第十回第一葉には「李 卓 吾 評 閲」の五文字が見えるが（圖12）、これも字様が周圍と異なるので、A・B・Dのそれと同じく、埋木による追加と見られる。

GはFよりも小規模な版木の一部分に對する補刻だが、やはり隣接する二葉が一組で現れる。例えば圖13では、右の葉の第五行以降の上二格と、それと左右對稱を成す左の葉の第八行までの上二格とが補刻である。Gの葉はいずれも上下を分かつのは自然發生した横割れで、左右は人爲的に切斷したようだ。手法の類似から見て、Fと同時の處理であろうか。なお、管見の限り、Gの補刻の存在については先行研究で言及されたことが無さそうである。

Hには、前述の通り補刻された文字が無い葉が含まれている可能性が高い。こちらはFと異なり自然に横割れが進んで版木が眞っ二つになってしまった事例であり、それを接ぎ直す際に片方に補刻が施されたと思しき場合がある。

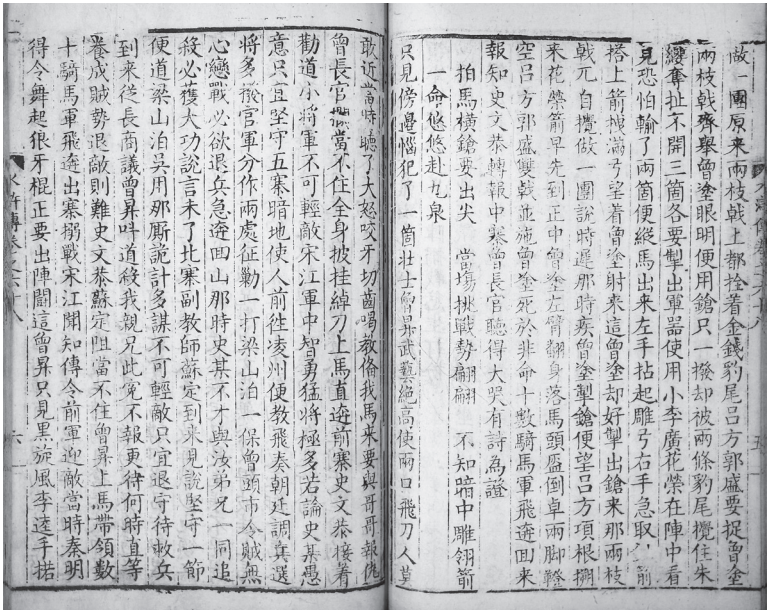


圖13　平田氏藏本卷六十八第五葉裏・第六葉表

例えば、圖14では左右どちらの葉も上七格が補刻であろう。だが、補刻の有無の判斷が難しい葉も多かったので、客觀性を擔保するために、横割れで版木が上下眞っ二つになっている葉を一律に全て擧げた次第である。特筆すべきこととして、中國國家圖書館藏本でHに分類した葉の全てが、平田氏藏本でも既にHに分類される狀態であった。このことにより、兩者の印刷時期が、新たに上下眞っ二つになる版木が生じることがない程度には近かったと推察される。

Iに該當するのは卷五第五・六葉の二葉のみ、つまり版木一枚分だけである（圖15）。字樣がAやBとは明らかに相違する。Cにはやや似た字樣の葉もあるが、A・B・Cがどの葉も有界であるのに對して、この二葉は完全に無界であるから、補刻の段階が違うのであろう。本文は異體字の相違を除いて中國國家圖書館請求記號一七三五八の容與堂刊本（以下、高島前揭論文に倣って「（容與堂刊本の）北京B本」と稱する）と一致し、前後の葉とも全く問題なく繫がっている。なお、北京B本の後修本である容與堂刊本の國立公文書館內閣文庫藏本では石渠閣補刻本の第五葉表第二

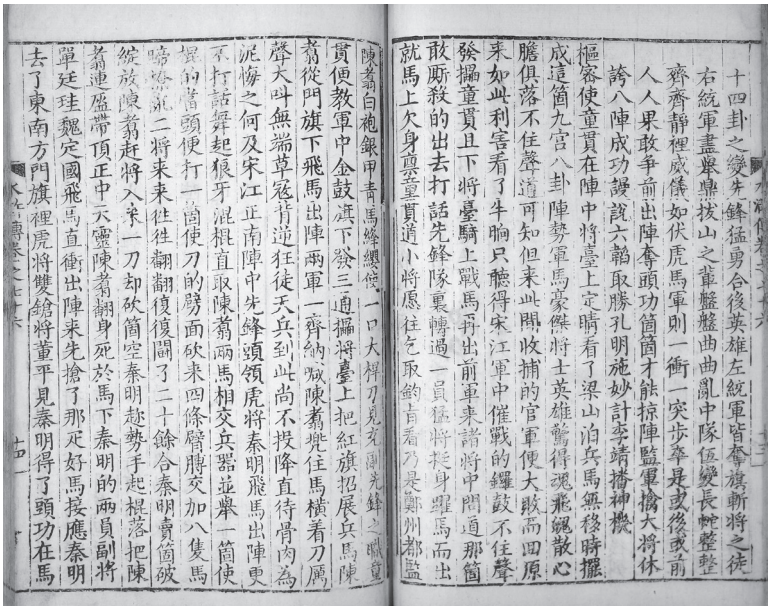


圖14　平田氏藏本卷七十六第十三葉裏・第十四葉表

～三行「一椅獨卓」が「　椅　卓」に變わっており、その箇所は覆容與堂刊本・四知館本・無窮會本は北京B本や石渠閣本と同文、芥子園本・全傳本・全書本・金聖歎本[19]では「卓椅等物」である。また、無窮會本・芥子園本・全傳本・全書本・金聖歎本には、いずれも石渠閣補刻本の第六葉表第二～三行の「我的哥哥大統領不下山来」の十一文字が無い。従って、Iの補刻は、Eと同じ手法でなされたか、さもなくば版木が傷む前に刷られた石渠閣補刻本・北京B本・覆容與堂刊本・四知館本のいずれか（ないし現存の知られないそれらと同系統の版本）を底本として翻刻することによってなされたともの思われる。石渠閣の補刻標識が無い點や字様から判斷すると康熙五年よりも後の補刻らしく見えるので、明版である右の各版本のいずれかを參照出來た可能性は低い。僅かにEと同じ手法ではない可能性があるとすれば、版木が傷む前に印刷されて市場に出回っていた石渠閣補刻本を一本入手して、それを底本としたというものくらいであろうが、おそらくはEと同じ手法によるものであろう。

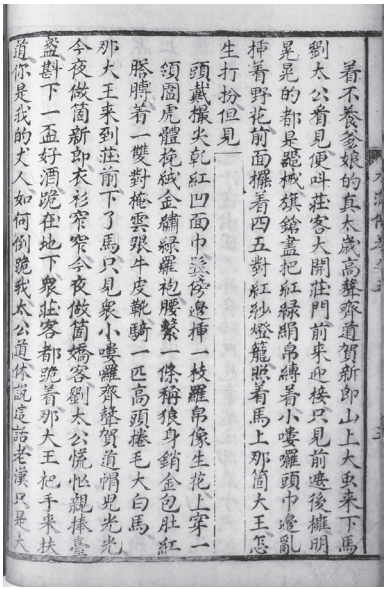


圖15　平田氏藏本卷五第五葉裏

Jに該當するのも、版木一枚分に當たる卷八十八第十三・十四葉の二葉のみである（圖16）。Iと同じく無界で、字様も同じとは言えないまでも近い感じはするが、魚尾の位置がIも含めた他の葉よりも二格も高いので、Iと同時か否かは微妙である。それを敢えて區分したのは、全千三百一葉の中で、この二葉だけが本文系統を異にするためである。早くも五四排印本の第八十八回校勘記〔八一〕に簡單な指摘があり、王利器前掲論文四〇〇頁で更に詳しく述

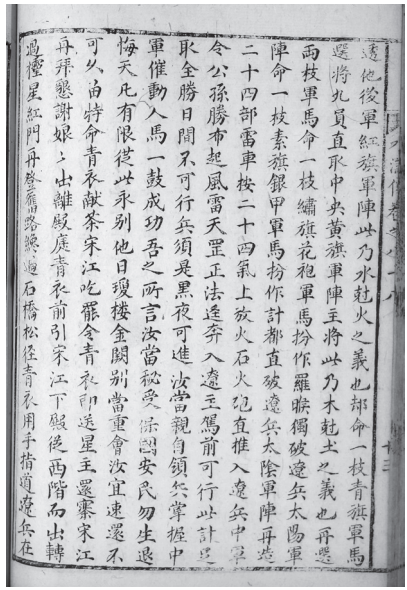
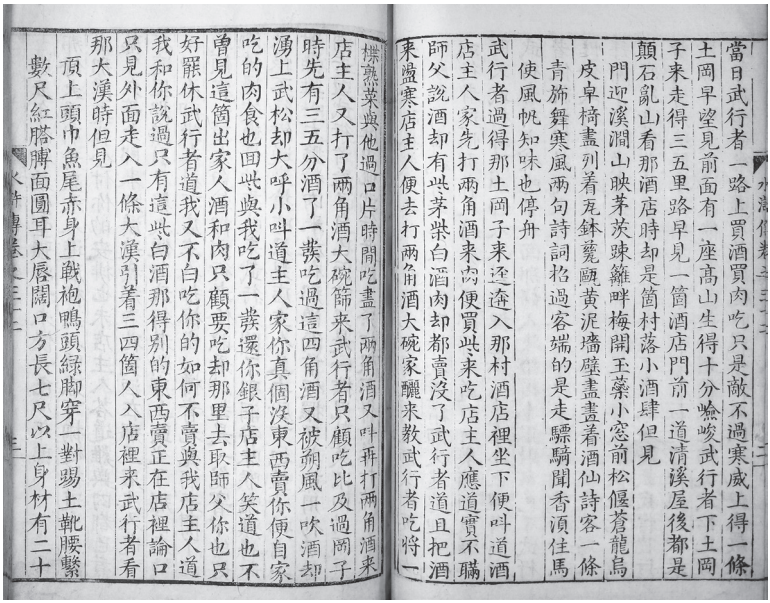


圖16　平田氏藏本卷八十八第十三葉裏

べられている通り、この二葉の本文は芥子園本・全傳本・全書本と概ね一致し、石渠閣補刻本と同系統である容與堂刊本系統の諸本とは明らかに異なっているのだ。[20] おそらく、この二葉はEのような單に版木の漫漶が進んだための補刻ではなく、版木が補刻の底本とするための一回の刷りすらも行い得ないほどの激しい損傷を受けたか、或いは版木を一枚紛失してしまったかしたことによる補刻であり、Eと同じ手法が採れなかったのであろう。同系統の本文を持つ版本を參照することも叶わず、たまたま參照することが出來た版本（時期と各版本の傳存數とを踏まえると、それは全書本であった可能性が最も高い）を底本として、Aに揃えた行款でそれを翻刻したものと思われる。どの版本とも一致しない明らかな誤字が複數あるので、[21] 他の段階の補刻に比べると杜撰だと言わざるを得ない。なお、第十四葉がこの卷の末葉なので、別系統の版本を底本としたことによって續く葉との接續に支障を來たすことにはならずに濟んでいる。王利器前掲論文四〇〇頁では、字樣と料紙からこの補刻を乾隆以降の處置と推測している。乾隆まで下ると言って良いかどうかまでは上原には判斷が付かなかったが、康熙五年よりも遲いだろうとは感じられた。

　Kのうち Kb に分類した葉は、字樣がBに近いほか、いずれも近くにBの葉がある。特に卷二十三第六葉や卷二十五第八葉は、同じ版木の反對の面に彫られているはずの卷二十三第五葉や卷二十五第七葉がBで、字樣もそれと一致しているから、[22] 一枚の補刻の版木で片面だけ「石渠／閣



當日武行者一路上買酒買肉吃只是敵不過寒威上得一條
土岡早望見前面有一座高山生得十分嶮峻武行者下土岡
子來走得三五里路早見一簡酒店門前一道清溪屋後都是
顛石亂山看那酒店時却是簡村落小酒肆但見
門迎溪澗山映茅茨疎籬畔梅開玉蘂小窓前松偃蒼龍烏
皮阜椅盡列着瓦鉢甕甌黄泥墻壁盡畫着酒仙詩客一條
青旆舞寒風兩句詩詞招過客端的是走驃騎聞香須住馬
使風帆知味也停舟
武行者過得那土岡子來逕逕入那村酒店裡坐下便叫道酒
店主人家先打兩角酒來肉便買些來吃店主人應道實不瞞
師父說酒却有些茅柴白酒肉却都賣沒了武行者道且把酒
來盪寒店主人便去打兩角酒大碗家醲來教武行者吃將一
樣熟菜與他過口片時間吃盡了兩角酒又叫再打兩角酒來
店主人又打了兩角酒大碗篩來武行者只顧吃比及過岡子
時先有三五分酒了一發吃過這四角酒又被朔風一吹酒却
湧上武松却大呼小叫道主人家你真個沒東西賣你便自家
吃的肉食也回些與我吃了一發還你銀子店主人笑道也不
曾見這箇出家人酒和肉只顧要吃却那里去取師父你也只
好罷休武行者道我又不白吃你的如何不賣與我店主人道
我和你說過只有這些白酒那得別的東西賣正在店裡論口
只見外面走入一條大漢引着三四箇人入店裡來武行者看
那大漢時但見
頂上頭巾魚尾赤身上戴袍鴨頭綠脚穿一對踢土靴腰繫
數尺紅腦膊面圓耳大唇闊口方長七尺以上身材有二十

圖17　平田氏藏本卷三十二第二葉裏・第三葉表

補」を彫り忘れた事例と見てまず間違いないだろう。従って、Bと同時の補刻で「石渠／閣補」が見えない葉というのは確かにあると認められる。また、巻二十三第十二葉は、原刻の版木の片面はそのまま使い（同第十一葉）、片面のみ補刻したものであるらしい（巻二十三は全十二葉だが、Aが七葉と奇數葉になっているため）。

単なるKとした葉は、Aとはどこかしら違う感じがするのだが、かといって典型的なBとも言えないと感じたものである。例えば圖17は右の葉がAで、左の葉がKである。

補刻の順序については、王古魯「讀『水滸全傳』本鄭序」（原載『文史哲』一九五五年第九期、本稿では王古魯著・苗懷明整理『王古魯小説戲曲論集』（中華書局、二〇一三）所收に據った）一九四頁ではBよりもCが先だと解釋し、馬幼垣前掲書一一一頁や荒木前掲論文二一八頁ではCよりもBが先だと解釋している。

この問題について詳しく檢討してみよう。Bは二百三十七葉と數が多く、Kの中にもBと同時の補刻が幾らか含まれるのは確實である。對して、CはDを入れても十七葉し

かなく、Kの中に同類らしいものも見當たらない。もしCがBに先立つのだとしたら、康熙五年の時點では十七葉しか補刻をする必要がなかったのに、その後で石渠閣が二百三十七葉以上もの補刻を施さなければならないほど漫漶が進行したことになる。しかし、補刻の段階が一つ異なる平田氏藏本と中國國家圖書館藏本との間で漫漶がそれほど進んでいないことを踏まえると、そういった事態は些か想定しづらい。それよりも、版木の二～三割前後に漫漶がひどくなった時點で最初に行われた補刻がBであるが故にBの數が飛び拔けて多く、その後で漫漶が進んだ葉に順次施された補刻がC・K・I・Eであった、と考える方が自然だろう。また、版木のくたびれ具合という面から考えても、Bには横割れが生じている葉が稀に見られるが、C・I・J・Eには大きな横割れは見られないので、Bの方がCよりも早く作られた版木であるように思われる。

先に字樣によってBと近い時期の補刻かと推定したFは、數の上でもCを上回るので、やはり初期段階の補刻と見て良いのではあるまいか。補刻の方法の類似から見て、おそらくGもFと同時であろう。Hのうち補刻が施されている箇所については、Fと同時の可能性もあれば、版木が割れるごとに隨時行われていた可能性もありそうだ。

なお、荒木が前揭論文で詳述した通り、石渠閣が他の書坊が作った版木に補刻を施して印行した版本は他にも複數現存しており、補刻葉の版心には石渠閣の名が刻されていることが多い。しかも、その中には石渠閣が複數回の補刻を行ったと見られる版本もある（『彙書詳註』『山堂肆考』『重刊人子須知資孝地理心學統宗』）。それらの補刻葉においては、底本と思しき版本と文字が一致し、他の系統に屬する版本とは一致しないという現象が見られ、石渠閣は自らの入手した版木の樣相に忠實な補刻を行っていたことが窺い知れる。それを踏まえれば、何の補刻標識も無いK（Bと同時ではないものに限る）・I・Jは、石渠閣以外の書坊が康熙五年よりも後に施した補刻である可能性が高そうだ。

「〇」という補刻標識を持つEは、K・I・Jよりも後の補刻であることが判明しているので、やはり石渠閣以外の書坊の手によるものということになる。

因みに、荒木前掲論文では、『山堂肆考』にはどちらも版心の補刻標識は同じ「石渠／閣補」ながら字様が明らかに異なる二種類の補刻があることを指摘し、両者は時期が異なる補刻だと判断した。それを念頭に置けば、Bの補刻も全てが同時に行われた譯ではない（＝Bの中では字様の劣る葉は、Bの中で字様の優れる葉より少し遅れて施された補刻である）という可能性もゼロではないかもしれない。

六　封面と插畫の來歴

ここからは中國國家圖書館藏本のみに殘る十二行二十四字以外の部分について考えてみよう。

まずは第一冊前副葉二枚の後に置かれている封面（圖18）だが、前述の如く中身には評など一文字たりとも附されていないというのに右欄に「李卓吾先生評」と記されており、中央欄も百回本でありながら百二十回本や文簡本の書名である「水滸全傳」となっている。いずれも明らかに羊頭狗肉であるから、荒木前掲論文二四七頁でも述べた通り、これはAの版木と最初からセットだったものではなく、一部の卷の卷頭に埋木によって「李卓吾評閲」の五文字が追記されたのと同時に附け加えられた封面だと見るべきであろう。前章で述べた通り「李卓吾評閲」はDの葉に對しても追記されているから、その處置は石渠閣が行ったものではあるまい。版木が石渠閣の手を離れて別の書坊の手に渡ってからの處置だったのではないだろうか。

また、この封面には中央欄上方に松竹圖をあしらった雙

圖18　中國國家圖書館藏本封面

邊朱圓印[23]が、左欄の「本衙藏板」に印の左側を重ねる形で陽刻正方「天／章／閣」朱印がそれぞれ捺されている。この二つの朱印は、いずれも馬幼垣前掲書や鄧雷前掲書に掲載されている書影では見えなくなってしまっている。天章閣の印は管見の限り先行研究では僅かに鄧雷前掲書四九頁に北京圖書館の藏書印と竝んで著錄されているのみで、荒木前掲論文も含めてほぼ無視されて來たものである。しかし、上原の經驗則からして、この位置に捺される印は、藏書印であることよりも、印行した書坊か發兌した書坊のどちらかの印であることの方が壓倒的に多い。してみれば、天章閣とは中國國家圖書館藏本を印行した書坊の名であった可能性がある。だが、康熙年間以降の天章閣という書坊については目下のところ他に知るところがなく、その當否は現時點では不明である。これは今後の課題としたい。

序は問題が多いので次章で詳述するとして、先に「水滸傳像」こと插畫について確認しておこう。この插畫は、馬蹄疾前掲書が「此像萬曆原刻本當沒有、爲清康熙石渠閣補修時取明容與堂刻本插圖複製的」（七一頁）と言い、鄧雷前掲書が「石渠閣補印本插圖與容與堂全本（上原注：本稿で言うところの北京B本）插圖從總體上來說基本相同、但是石渠閣補印本插圖比容與堂全本插圖更爲簡略」（五一頁）と言い、馬幼垣前掲書が「從挂名天都外臣序本『水滸傳』的插圖看該本的素質」（四一一～四二三頁及び卷頭插圖三二～五〇）という專論一篇を割いて詳しく論じている通り、二百幅ある北京B本の插畫のうち九十六幅をやや簡略化しながら模刻したものである。北京B本の插畫を模刻したものには他に覆容與堂刊本の插畫と無窮會本の插畫もあるが、瀧本弘之「「水滸傳」諸本の插畫について」（瀧本弘之編『中國古典文學插畫集成（三）水滸傳』所收、遊子館、二〇〇三）六～七頁で相違點や繼承關係について詳しく考察されている三者の「王婆貪賄説風情」圖（第二十四回前半）を石渠閣補刻本の「水滸傳像」第十三葉裏の同題の圖と比べると、北京B本と最も良く特徴が一致する。よって、通説通り北京B本の系譜を引く插畫と見て良いだろう。

但し、先行研究に問題が無い譯でもない。例えば、馬幼垣氏は、北京B本に比べて石渠閣補刻本の方がより本文に

沿った描寫に改良している圖が少數ながらあるとして、①第三十一回後半の圖で武松に殺された道童の死體を石渠閣補刻本だけが描く、②第七十二回前半の圖で石渠閣補刻本だけが屏風の中に四大寇の名を記す、③第六十四回前半の圖で北京B本では呼延灼が鎗を手にしているのを石渠閣補刻本では鞭に變えている、④第九十五回後半の圖で北京B本では張順の亡靈が方天定の生首を持っていないのを石渠閣補刻本では持たせている、といった例を擧げている（四二一頁）。ところが、このうち妥當な指摘は②だけなのだ。①と④は、北京B本の影印本である『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、一九七五）や、そのリプリントである『古本小說集成』所收影印本では、確かに馬幼垣氏の指摘通りになっている。しかし、それは實は影印の際に殘酷描寫を削除する改變が加えられたためにそうなっているのであって、北京B本の原本には、首と胴とがお別れになった道童の死體が轉がっているさまや、張順が左手に生首をぶらさげているさまが、いずれもはっきりと描かれている。[24]とはいえ、①④について馬幼垣氏を責めるのは酷であろう。しかし、③に關しては頂けないと言わざるを得ない。この回の前半は呼延灼が官軍に寢返ったと見せかけて官軍を率いる關勝を空の本陣におびき寄せ、そこを梁山泊軍が包圍攻擊するという筋立てで、呼延灼が遠くに見える本陣の目印の紅燈を關勝に指し示す場面を描いたのが問題の圖である。馬幼垣氏の指摘通り、北京B本では鎗だった呼延灼の手にする武器が、石渠閣補刻本では確かに鞭に變わっている（圖19左）。しかし、石渠閣補刻本の當該場面本文は次の通りである（傍線は筆者が附した）。

呼延灼縱馬先行、關勝乘馬在後、又轉過一層山嘴、只見呼延灼把鎗尖一指遠遠地一碗紅燈。關勝勒住馬、問道、「有紅燈處是那里？」呼延灼道、「那里便是宋公明中軍」。急催動人馬。將近紅燈、忽聽得一聲炮響、衆軍跟定關勝、殺進前來、到紅燈之下看時、不見一箇。便喚呼延灼時、亦不見了。（卷六十四第八葉）

この部分は北京B本でも異體字の相違があるのみで、やはり呼延灼は鎗の先で遠くの紅燈を指し示している。そもそも、呼延灼は第七十九回の韓存保との一騎打ちでは最初は

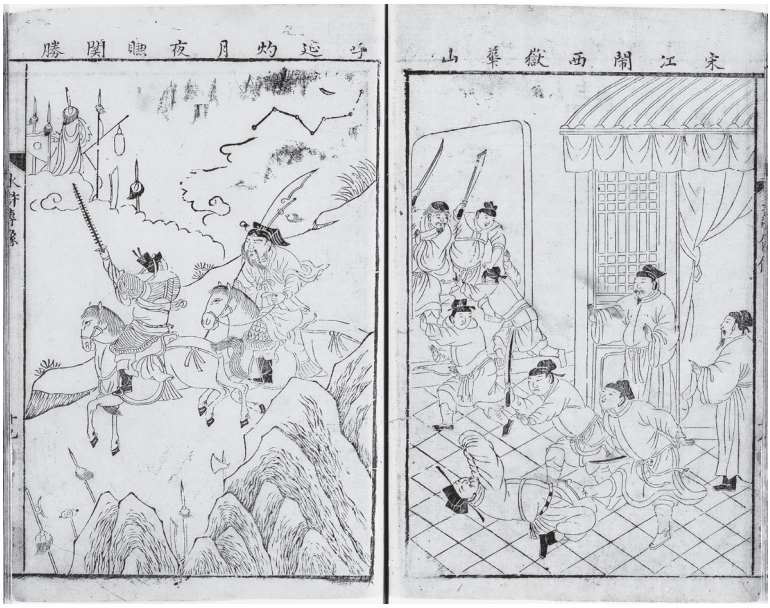


圖19　中國國家圖書館藏本圖第二十八葉裏・第二十九葉表

鎗を使って後から雙鞭に持ち替え、その後でまた得物を鎗に戻して戦っているので、ここで呼延灼が鎗を持っていても何もおかしくはない。また、北京B本の圖では呼延灼の鎗の穂先がきちんと紅燈らしき提燈の方を向いているのだが、圖19左では呼延灼の鞭の先は提燈とは別の方向を向いてしまっている。つまり、石渠閣補刻本のこの圖は、呼延灼の「雙鞭」という綽號に引きずられて、本文に忠實な描寫を改惡してしまったものなのだ。どうやら馬幼垣氏も、同じ理由で本文を確かめないまま石渠閣補刻本の方が適切だと卽斷してしまったようである。

また、前述の通り、馬蹄疾氏はこの插畫を石渠閣が補刻の際に北京B本の圖を模倣して新たに作ったとしていた。一方、馬幼垣氏は「每一葉的版心部分都很明確、內中完全沒有補刊字樣的題識。這五十葉顯然都是原本已有的、與把那本子補刊成現在的樣子的石渠閣無關」（四二三頁）と正反對の見解を述べている。この點については、上原の意見はどちらでもなく、もともと他の版本のために彫られた插畫の版木を手に入れてこの版本に使いまわしたのではないか

と考えている。康熙年間以降に刊印された章回小説版本が他の版本の插畫だけを再利用している事例は間々見られるもので、例えば上原が博士論文「百回本『西遊記』の成立と展開――書坊間の關係を視野に――」（東京大學大學院人文社會系研究科、二〇一六、http://doi.org/10.15083/00075383）第六章「清本諸系統の版本について」で詳述したように、康熙三十三年と三十五年の序を持つ陳士斌詮解本『西遊真詮』の十行二十二字A本及びB本の插畫は、いずれも〔崇禎〕刊本『李卓吾先生批評西遊記』（李卓吾評甲本）の插畫百葉二百幅の版木を手に入れて使いまわしたものである。また、南京圖書館所藏の『李卓吾先生批評三國志』（李卓吾乙本）[25]には、本文が同版の宮內廳書陵部藏本とは異なる插畫が附されており、それは本文系統を全く異にする京都大學人文科學研究所所藏の〔乾隆〕敦化堂刊本『四大奇書第一種』十九卷一百二十回[26]の插畫百二十葉二百四十幅の同版後修のものである。更に、その插畫は臺灣國家圖書館所藏の封面（左下に「大魁堂藏版」とあり）と序と插畫のみの殘本（南京藏本と同じく後修）や、ベルリン州立圖書館所藏の插畫しか殘らない殘本（人文研藏本と同じ狀態）等とも同版である。この插畫は『三國演義』の李卓吾甲本A・Bや李卓吾乙本の宮內廳書陵部藏本の插畫（三者はそれぞれ異版）をやや簡略化した模刻であり、しかも石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の插畫と畫風が良く似ている（圖20）。それを踏まえて、石渠閣補刻本の插畫は、「李卓吾評

圖20　南京圖書館藏本『李卓吾先生批評三國志』第十一回圖表（『三國志演義古版叢刊續輯』所收影印本より）

閲」を埋木により追記した書坊の手によって、李卓吾のものと銘打つ批評を持つ版本から、封面と一緒に使いまわされて來たものなのではないかというのが上原の見解である。

なお、この插畫にはいわゆる又丁（直前の葉の丁付と同じ數字に「又」が付く丁付になっている葉）が複數あるのだが、馬幼垣前掲書や鄧雷前掲書の著錄ではその様相が明確ではないので、各葉の丁付・對應する回數・表裏それぞれの圖題を表2にまとめた。その備考欄に記した通り版心題の位置や魚尾の白黑が不統一で、丁付にも混亂が見られるところを見ると、版心は最初からこの狀態だったのではなく、埋木改刻されているかもしれない。もし實際にそうであったとしたら、本來は百葉二百幅あった插畫のうち版木を入手出來たのがこの四十八葉分だけであったために、缺落が無いかのように裝うべく丁付を版心ごと改める措置が行われたが、その際に丁付に混亂を來たしてしまった、といったような事態が想定される。馬幼垣前掲書四二一頁では石渠閣補刻本は數多くの名場面に插畫が無いことを指摘した上で、その原因をこの版本の杜撰さに求めているが、そういった名場面の插畫は、元々は作られていたが版木が失われたのだと考える方が自然ではないだろうか。

七　「天都外臣序」をめぐって

本章では「水滸傳叙」について檢討を加える。この序で問題になるのは、何と言ってもまず第一に、末尾の署名は「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」であるという五四排印本で示された判讀が妥當なものなのかという點である。問題の部分の書影は吳曉鈴前掲論文、馬幼垣前掲書、鄧雷前掲書に掲載されているが、いずれも同じ時に撮影したフィルムによるものらしく、あまり寫りが良くない。具體的には、原本でははっきり存在が確かめられる上二文字の右端と思しき筆畫が、その書影では全く見えなくなってしまっているのである。それに基づくのでは確かな議論は出來ない。幸い、今回は中國國家圖書館のご厚意により、新たに撮影した高精細なカラー畫像をご提供頂くことが出來た（圖21）。

吳曉鈴前掲論文では、吳曉鈴氏と戴望舒氏は、まず第七～十字について「毫無疑問地當是「天都外臣」」（二一頁）

表 2

丁付	回	表圖題	裏圖題	備考
一	1	張天師祈**禳**瘟疫	洪太尉**悞**走妖魔	
二	3	史大郎夜走華陰縣	魯提轄拳打鎮関西	
三	4	趙員外重修文殊院	魯智深大鬧五臺山	上象鼻に版心題
四	5	小覇王醉入銷金帳	花和尚大鬧桃花村	上象鼻に版心題
六	8	林教頭刺配滄州道	花和尚大鬧野猪林	
七	11	朱貴水亭施號箭	林冲雪夜上梁山	
八	12	梁山泊林冲落草	汴凉城楊志賣刀	
十	15	吳學究説三阮撞儔	公孫勝應七星聚義	「聚」上部印刷不良
十一	20	梁山泊義士尊晁盖	鄆城縣月夜走劉唐	
十二	21	**虔**婆醉打唐牛兒	宋江怒殺閻婆惜	丁付「二」汚損･破損
又十	17	花和尚単打二龍山	青面獸夜奪寶珠寺	亂丁
十三	24	王婆貪賄説風情	鄆哥不忿鬧茶肆	上象鼻に版心題
十四	25	閻婆計啜西門慶	淫婦薬鴆武大郎	上象鼻に版心題
十五	27	□□又孟州道賣人肉	武都頭十字坡遇張青	表圖題前二字破損
十六	28	武松威鎮安平寨	施**恩**義奪快活林	
十七	31	張都監血濺鴛鴦樓	武行者夜走蜈蚣嶺	「濺」一部破損
又十七	34	鎮三山大鬧青州道	霹靂火夜走瓦爍場	
十八	36	梁山泊吳用舉戴宗	揭陽嶺宋江逢李俊	
十九	41	宋江智取無為軍	張順活捉黄文炳	白魚尾
二十	42	宋公明遇九天玄女	還道村受三卷天書	表裏が回目と逆
廿一	46	病関索大鬧翠屏山	揜命三火燒祝家庄	
廿二	47	撲天鵰雙脩生死書	宋公明一打祝家莊	
廿三	48	一丈青**単**捉王矮虎	宋公明両打祝家莊	
廿四	50	吳學究雙掌連環計	宋公明三打祝家庄	白魚尾、圖内に補筆
廿五	51	挿翅虎枷打白秀英	美髯公誤失小衙内	
廿六	52	李逵打死殷天錫	柴進失陥高唐州	
廿七	53	戴宗智取公孫勝	李逵斧劈羅真人	白魚尾
廿八	59	吳用賺金鈴弔掛	宋江鬧西嶽華山	
廿九	64	呼延灼月夜賺関勝	宋公明雪天擒索超	
三十	66	時遷火燒翠雲樓	吳用智取大名府	
三一	68	宋公明夜打曽頭市	盧俊義活捉史文恭	
三二	69	東平府誤陥九紋龍	宋公明義釋雙鎗将	
三三	71	忠義堂石碣受天文	梁山泊英雄排坐次	
三四	72	柴進**簪**苍入禁院	李逵元夜鬧東京	
三五	73	黒旋風喬捉鬼	梁山泊雙獻頭	
三六	74	燕青智撲擎天柱	李逵壽章喬坐衙	
三七	75	活閻羅倒船偷玉酒	黒旋風扯詔謗徽宗	「活」上部印刷不良
三八	77	梁山泊十面埋伏	宋公明兩嬴童貫	
三九	78	十節度議取梁山泊	宋公明一敗高太尉	
四十	81	燕青月夜遇道君	戴宗**乏**計出楽和	
四一	86	宋公明大戦獨鹿山	盧俊義兵陥青石峪	
四二	87	呼延灼力擒**畨**將	宋公明大戦幽州	表裏が回目と逆
四三	88	顔統軍陣列混天象	宋公明夢授玄女法	
四四	89	宋公明破陣成功	宿太尉頒是降詔	「明」左側印刷不良
四六	92	盧俊義分兵宣州道	宋公明大戦毘陵郡	
四八	94	湧金門張順歸神	寧海軍宋江吊孝	表裏が回目と逆 上象鼻に版心題
四九	95	宋江智取寧海軍	張順**竟**殺方天**乏**	表裏が回目と逆 上象鼻に版心題
五十	97	睦州城箭射鄧元覺	烏龍嶺神助宋公明	

※第10、16、32、41、46葉の「義」と第39葉の「議」の旁は「羊＋氷」に作る（他の箇所では「義」）。

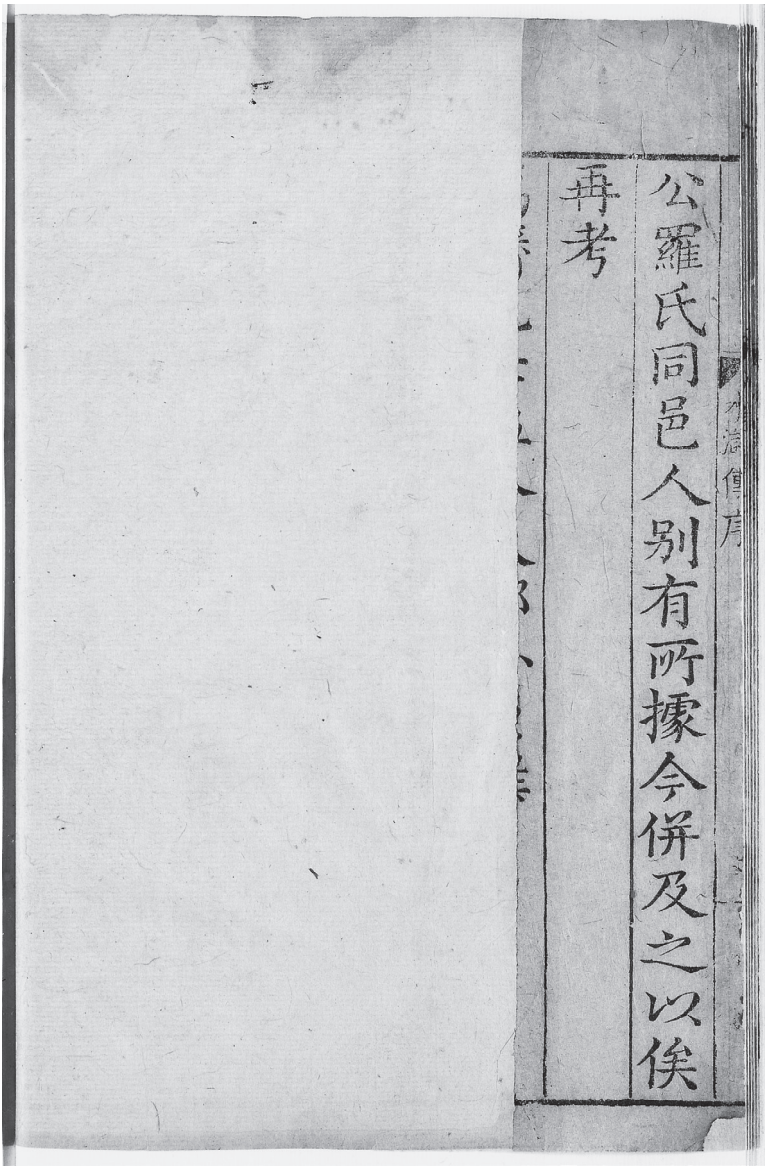

公羅氏同邑人別有所據今併及之以俟
再考

圖21　中國國家圖書館藏本「水滸傳叙」第六葉裏

と判断したという。しかし、沈德符『萬曆野獲編』によって天都外臣の序を冠した『水滸傳』版本が萬曆年間に存在したことが分かる、という豫備知識を持たずにこの署名だけを見たら、どう頑張ってもその四字が候補に出されることはないだろう。高島前掲論文も指摘する通り、「毫無疑問」は明らかに言い過ぎである。しかし、その豫備知識を持った上で見れば、八字目には間違いなくオオザトがあるから「都」かもしれないし、その下の點は「外」の末畫であっても全くおかしくない形をしている。オオザトの字の上も「天」の末畫の拂いらしくはあるし、カラー畫像を擴大して行くと「天」の二畫目の右端らしき位置にごく小さくだが墨が乘っているのが見えた（原本ではとても分からなかったが）。「外」の末畫であってもおかしくない點の下の字は、少し崩した「臣」の右端だと言われれば納得してしまう形はしている。つまり、この四字が「天都外臣」だったとしてもおかしくない筆畫が見えるのもまた確かなのだ。

吳氏と戴氏は續いて最後の字を「撰」と判斷したというが（二一頁）、形からも署名の末字に當たるという意味上の問題からも、最後の文字を「撰」と推定することに關しては、上原としては全く異論は無い。同義の「譔」である可能性は十分あるが、そのどちらかなのはまず確かであろう。

その上で兩氏は上から六字分に戻って「萬曆己丑孟冬」なのではないかという推測にたどり着いたが、この六字は下の五字よりもずっと難解であり、假に「萬曆」と「孟冬」（吳氏は「孟秋」もあり得るという注を付けている）の二箇所が間違っていないとしても、間の「己丑」には自信が持てないと吳氏は告白している（二一頁）。だが、上原が二〇一五年八月に原本を見ての印象で最初に確實だと感じたのは、上の二文字が「萬曆」だという點であった。そして、その印象は二〇一八年十月の原本閲覽時にも變わらなかった。この位置には年號が來る可能性が高いが、序の文中で洪武年間のことや嘉靖年間のことについて年號を出しながら觸れているので、署名に冠されているのが嘉靖より前の年號だというのはあり得ない。嘉靖以降の年號なら、康熙以降のものまで含めても、この形になるのは「萬曆」しかあり得まい。[27] 荒木もその點は全く同感である。

「萬曆」が確かであれば、年號と撰者名に挾まれた四字は、まず年月を表すものであろう。ここには「年」か「歳」らしい字は見えないし、五字目が「孟」の右端でもおかしくない形を確かにしているので、この四字が「干支＋孟＋季節」だという判斷は極めて妥當なものだと上原は感じている。季節については春夏秋冬の全てに六字目の殘存部分のような右拂いがあるのでとても特定は出來ないが、上下の字の殘存部分との高さのバランスを考えると、「冬」か「春」のどちらかの方が「夏」や「秋」よりも可能性が高いのではないだろうか。殘るは三～四字目の干支だが、十干の中で三字目の殘存部分のような形になるのは吳氏の言う通り「己」か「乙」のいずれかしかあるまい。となると、三字目がそのどちらであったとしても、それと組み合わさる四字目の十二支は丑・卯・巳・未・酉・亥の六種に絞られる。その中で右端に横畫二本だけが見える四字目のような形になるのは丑だけなのではあるまいか。すると、萬曆十七年が己丑であり、萬曆年間に乙丑の年は無いことから、消去法により干支には「己丑」以外の候補は殘らない。

以上、上原が原本を二度にわたって見た上で、その後に提供されたカラー畫像の擴大も併せて判讀を試みた結果としては、吳曉鈴氏の證言とは反對に、上の四字が「萬曆己丑」である可能性は非常に高いが、「天都外臣」については、そうであったとしても確かに何もおかしい點はないけれども、豫備知識がなければ絶對に思いつかないだろうという程度だ、ということになった。總じて、上原は高島前掲論文が強く否定するほどまで吳曉鈴氏と戴望舒氏の判讀が無茶なものだとは思わない。天都外臣かどうかは措くとしても、「萬曆己丑」と記された序文であるという點は確實視して良いだろうというのが上原の意見であり、荒木もその判斷には異論は無い。

この序をめぐるもう一つの大きな問題は、假に末尾の署名が天都外臣であったとしても、沈德符が見て『萬曆野獲編』に記した序文そのものだと見て良いのか、それとも『萬曆野獲編』によって天都外臣の序を持つ善本があると知った人物によって僞作された序文なのか、という點であ

る。その問題に關して、聶紺弩「論『水滸』的繁本與簡本」（原載『中華文史論叢』一九八〇年第二期、本稿では聶紺弩『中國古典小說論集』（復旦大學出版社、二〇〇五）所收の加筆修正版に據った）一五四～一五五頁に次のようにある（傍線と丸數字は筆者が加えた）。

我看見過這箇本子。看到時、「敍」的末幅年月題署一行已被裁去、所謂「萬曆己丑孟冬天都外臣撰」等字、已一字不存、僅據未裁淨的幾點筆畫收尾處、看出確實這是幾箇字。①順便說一句、這部書的每回末頁、卽所謂「下回分解」處、哪怕只占那頁的一兩行、那些空白紙沒有一處是被裁了的。②我看見時、這書已歸鄭振鐸先生所有。有人在歸鄭所有之前已見過、據說、那時這「敍」的年月署題還未被裁掉、而且年月題署幷非最後一行、後面還有一行、刻着「康熙間」的年月及別的字樣。這樣一說、年月署題被裁而又留下可以辨認的痕迹、道理就很顯然了：書賈要滅掉「康熙」字樣而留下「萬曆」字樣、以便把淸本當明本而賣得高價。本來只需裁掉「康熙」那一行就得、連「萬曆」這一行也幾乎裁得干干淨淨、是由於一時失手或別種原因、那就不必追問了。總之、這篇「敍」不是明代舊版而是淸康熙時刻的。③那然如此、連文字也是康熙時假托、不是很可能麼？

聶紺弩氏のこの證言は數々の先行研究で問題にされて來たものであるが、その中で指摘されて來なかった問題點がある。傍線部①で各回の末葉の紙はどこも全く切り取られていないというのが、完全に實情に反した證言なのだ。第一章で述べた通り、版木には全卷の末葉の裏面末行に「忠義水滸傳卷之幾」という尾題が彫られていたはずなのだが、中國國家圖書館藏本にはそこまで紙が殘っている卷は數えるほどしかなく、殆どはそれより前で切り取られている。それどころか、序末の署名と同じように、その卷の本文が終わる行自體が右側の一部だけを殘して切り取られてしまっている箇所が三つもある。卽ち、卷四十三第十九葉裏の本文の最後の一字「解」だけがある第十一行（右三分の一ほどを殘してまっすぐ切り取られる）、卷八十二第十五葉裏の本文の最後の七字「誰且聽下回分解」だけがある第十行（右半分弱を殘してまっすぐ切り取られる）、卷九十第十五葉

裏の本文の最後の三文字「（低三格）公孫勝」だけがあるはずの第十行（三文字の右端だけを僅かに殘す形で不規則に破り去られる）の三箇所である。聶紺弩氏は中國國家圖書館藏本をあまり丁寧に見た譯ではないことが分かる。なお、切り取られている箇所は、まっすぐ切斷されている場合も刃物で切ったような感じではなく、折り目を付けるか定規を當てるかした上で手で破ったような感じである。

同じように本文の末尾が文字の右端だけを殘して切り取られてしまっている箇所が他に三つもあるとなると、序末の署名の裁斷だけを特別視して良いかどうかには疑問の餘地が生じよう。もちろん、版本の價値を判斷する際の重要な情報であるから、あってもなくても構わないような卷尾題やら、途中の卷の本文の最後の數文字やらとは重みは全く異なる。それは認めるが、聶紺弩氏が傍線部②で言うような事情があったとは、この證言だけではどうにも信じがたい。鄧雷「『水滸傳』天都外臣序言考辨」（『臨沂大學學報』第三十七卷第一期、二〇一五）一一八頁でも、ある人に聞いたというのがどのくらい信用出來る情報なのかという問題があることや、序文が僞作なのであればわざわざ僞作した年月を書くはずがないだろうという指摘がなされている。本文の最後の行の文字が切られている他の三箇所と同じく、序末もたまたま切り取られてしまった（上原が中國國家圖書館藏本の各卷の末葉の紙の狀態を見ての印象としては、例えばもう少し左の位置から破り去るつもりだったのに手が滑って署名の文字まで破いてしまい、見榮えを良くするために破けていないところから改めてまっすぐ切斷した、というような可能性はありそうに感じる）だけだということもあり得るのではないだろうか。

そして、傍線部③については、聶紺弩氏はこの引用よりも前の部分で、「水滸傳叙」と同じような文面が、周亮工が康熙初期に獄中で編んだという『因樹屋書影』や、明末刊本である『忠義水滸全傳』不分卷一百二十回に附された「出像評點忠義水滸全傳發凡」などに見えることを指摘して、康熙年間に「發凡」や『書影』など幾つかの文章を切り貼りして僞作されたのがこの序だという見解を示しており、高島前掲論文はこれに全面的に贊同している。獄中に

いた周亮工が「水滸傳叙」をほぼ正確に引用出來る譯がないので「水滸傳叙」の方が『書影』を襲ったのだというのが聶氏の論法なのだが、その點については、鄧雷前掲論文一一八頁の、『書影』は獄中で編まれたと言っても周亮工には出獄後に修正の機會は幾らでもあったはずだし、『書影』に先立って順治末期に成立したと見られる梁維樞『玉劍尊聞』も同じ引用をしているという批判が當を得ているだろう。

附言すれば、荒木前掲論文で考證した通り、石渠閣を代々營んだ蔣氏は明末に王氏車書樓グループに加わって書籍の編集や刊行に携わっていたのだが、車書樓グループの編んだ本を刊行したことのある書坊の一人に、周亮工の叔父である周文燿[28]がいる。ということは、周亮工も石渠閣と何らかの繋がりを持っていた可能性が考えられ、そうであれば石渠閣補刻本を周亮工が目睹していたとしても何の不思議もない[29]。石渠閣補刻本そのものに附いていた「水滸傳叙」を周亮工が引用したと考えることも不可能ではないのではあるまいか。

この序の内容面からの眞僞の檢討は本誌小松論文に讓るが、版木の狀態から考えても、「水滸傳叙」の版木は控えめに言っても康熙五年のCの補刻よりは確實に古びている（圖22）。それどころか、はっきりと漫漶が進んだ箇所は見られないものの、原刻のAの中にも「水滸傳叙」の各葉と同程度の狀態の葉は數多くあるので、Aの版木と同時に作られたものであったとしても不思議はない。石渠閣と周

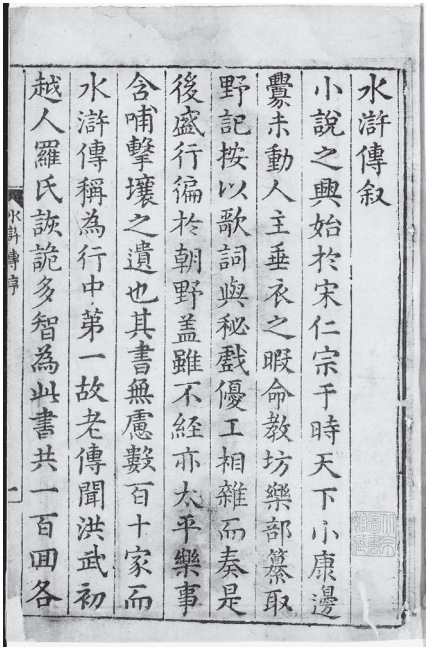

水滸傳叙
小說之興始於宋仁宗于時天下小康邊
釁未動人主垂衣之暇命教坊樂部纂取
野記按以歌詞與秘戲優工相雜而奏是
後盛行徧於朝野蓋雖不經亦太平樂事
含哺擊壤之遺也其書無慮數百十家而
水滸傳稱為行中第一故老傳聞洪武初
越人羅氏詼詭多智為此書共一百回各

圖22　中國國家圖書館藏本「水滸傳叙」第一葉表

亮工との關係も踏まえると、この序は版木が石渠閣の手に入る以前からAとセットになっていた可能性がかなり高いと上原は感じている。そうであってみれば、最初からAと同時に作られた可能性も十分にあるということにもなろう。

おわりに

以上の檢討の結果、石渠閣補刻本の補刻は、まず石渠閣によるBとKb（おそらく同時期にFとGも）が施され、次いで康熙五年にC（Dを含む）が、更にIとJが順不同で施されて、最後にEが行われたことが判明した。HとKの施された時期は、葉ごとに一律ではないかもしれない。

また、中國國家圖書館藏本の前付のうち、目錄と引首は最初から本文の原刻部分と一緒に作られた版木によるものに相違なく、封面と插畫はCの補刻よりも後におそらく石渠閣以外の書坊が一部の卷頭の「李卓吾評閲」と同時に加えたものである可能性が非常に高く、問題の「水滸傳叙」は、石渠閣が版木を入手した時點で既に目錄・引首・本文とセットになっていた可能性が高く、原刻部分と同時に作られた可能性も十分にある、といった結論も得られた。

最後に、その原刻の版木がいつどこで作られたものなのかという問題について觸れておきたい。「水滸傳叙」は天都外臣汪道昆の眞作で最初から原刻部分とセットで版木が作られたと結論付けている鄧雷前掲論文や、やはりこの序が天都外臣の眞作である可能性を高く見積もっている本誌小松論文は、沈德符『萬曆野獲編』の「武定侯郭勲、在世宗朝、號好文多藝能計數。今新安所刻水滸傳善本、即其家所傳。前有汪太函序、託名天都外臣者」という記述も踏まえて、石渠閣補刻本の原刻部分は徽州新安で作られた版木ではないかという立場を採っている。小松氏はAの葉の萬曆年間の徽州刊本との字樣や版式の類似も指摘しており、確かにAの葉は萬曆十七年の徽州刊本だとしても全くおかしくない風格を持っている。

しかし、上原と荒木は、ここでもう一つ別の可能性も提示しておきたい。それは、荒木前掲論文の結語で既に述べているのだが、原刻が萬曆二十年前後の金陵刊本であった可能性である。

上原はかつて單著論文「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中國學會報』第六十三集、二〇一一。加筆修正して前掲博論第四章「李卓吾批評本系の版本について」）において、『三國演義』『水滸傳』『西遊記』の三者に、いずれも版式や插畫の特徴が似通った萬曆三十年代後半頃刊の李卓吾評本があることと、そのうち『西遊記』と『三國演義』はいずれも萬曆二十年前後の互いに特徴を同じくする金陵刊本を底本（或いは少なくとも底本の一つ）にしていることを指摘した。その金陵刊本とは、『西遊記』では萬曆二十年序刊の唐氏世德堂刊本『新刻出像官板大字西遊記』、『三國演義』は萬曆十九年刊の周曰校萬卷樓刊本『新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義』（いわゆる周曰校乙本）である。また、同じく上原の單著論文「金陵唐氏世德堂刊本講史小說三種と上元王氏の雙面連式插畫について」（瀧本弘之編『中國古典文學插畫集成（九）・小說集〔三〕』所收、遊子館、二〇一四）では、提携關係にあった唐氏世德堂と周氏萬卷樓が上元王氏の畫工を起用して出版した一連の章回小說シリーズにこの二つの金陵刊本が含まれることも指摘した。

荒木前掲論文では前掲上原二〇一一を承けて、中川前掲書も引きつつ、『西遊記』と『三國演義』の萬曆三十年代後半の李卓吾評本が萬曆二十年前後の金陵刊本の影響を受けたものであるなら、『水滸傳』の李卓吾評本である萬曆三十八年序刊の容與堂刊本にもそれに當たる金陵刊本があった可能性を指摘し、未發見のその金陵刊本たるに相應しい條件を石渠閣補刻本『忠義水滸傳』が滿たしていることを指摘した。荒木はそこで、當該論文内で詳細に考證した『忠義水滸傳』以外の石渠閣補刻本の多くが金陵と關わりのある書坊が原刻本を刊行したものであったことや、石渠閣補刻本の版式が唐氏世德堂刊本『西遊記』と同じ十二行二十四字であることなども、その條件を滿たしている一點として擧げている。

それに先立ち、前掲上原二〇一四では、共通點を多く含むシリーズではあっても、世德堂の章回小說刊本は十二行二十四字を定式とし、萬卷樓の章回小說刊本は十三行二十六字を定式とするという各自の特徴があることを指摘して

いた。また、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』のAの部分の字様は、小松本誌論文が指摘するように萬曆年間の徽州刊本にも良く見られるものではあるが、唐氏世德堂刊本『新刻出像官板大字西遊記』にも類似の字様は見出せる。更に、荒木前掲論文で述べた車書樓グループの出版に關與した中には、周氏の書坊も唐氏の書坊もいた。

以上を考え併せると、狀況證據としては、石渠閣補刻本の原刻部分は萬曆二十年前後の金陵刊本であったという可能性が浮上して來ないだろうか。そう考えると、萬曆十七年の序が最初から附いているというのも自然なことに思えて來る。

天都外臣の序は新安刊本に附いていたという沈德符の證言との整合性は問題になるが、そもそも石渠閣補刻本の原刻部分には、刊行者の名も刊行地についての情報も一切記されていない。もし假に封面にも刊行者名も刊行地も見えなければ、原刻本には刊行地が明記されていなかったことになる。よって、假に沈德符がそういう狀態の原刻本を見たのだとしたら、徽州歙縣の人である汪道昆が徽州の地名である「天都」を冠した號で序を書いているという認識によって、實際にはどうであったかとは無關係に新安刊本だと思い込む可能性はあるのではないか。なお、唐氏や周氏の書坊は明代を扱う章回小說には刊行者名を記さない方針を採っていたようなので、[50]『水滸傳』も何らかの理由でそれに準ずる處置が採られた可能性はあろう。[31]

但し、原刻部分を金陵刊本と見るこの假說には、重大な弱點が二つある。一つめは、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』には、批評や注釋はおろか、句讀や圈點すら附いていないという點である。唐氏や周氏の金陵刊本は、句讀や圈點は元より、固有名詞には傍線を附し、時には破音字に圈發まで加え、批評や注釋も滿載するのが常であったから、この點では石渠閣補刻本『忠義水滸傳』は金陵刊本らしくはない。句讀も圈點も批評も注釋も無いというのは、本誌小松論文が指摘する通り、徽州刊本に見られる特徵である。

二つめは、石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の原刻部分には插畫が無かったと思しいことである。『西遊記』と『三國演義』の萬曆二十年前後の金陵刊本が李卓吾評本に與えた

影響の中には、插畫の構圖が直接引き繼がれたというのも含まれる。そのため、石渠閣補刻本が現在持っている插畫が康熙五年よりも後に別の版本から加えられたものだという本稿の結論は、金陵刊本説にとっては不利なものとなる。

よって、金陵刊本かもしれないというのはあくまでも一つの可能性の提示であって、上原も荒木も、徽州ではなく金陵だと強く主張するほどの材料を持っている譯ではない。しかし、徽州新安刊本だと決めてかかれるほどの材料も揃ってはいないと感じるので、注意を喚起して今後の檢證に委ねるべく、檢討課題として結びに記した次第である。

註

① 二つのルートからそれぞれマイクロフィルムを入手したが、どちらも同じ親フィルムから複製されたフィルムであったという（馬幼垣前掲書一〇七頁）。

② なお、鄧雷前掲書は①全百回の目錄に見える回目、②全百回の本文内での回目、③全九十六幅の圖の標題、④第七十一回に見える梁山泊百八人の星の名と綽號と席次、という大掛かりなリスト四種を獨自の調査によって著錄しており、決して鄧雷氏の調査方針がいい加減なものだった譯ではない。調査可能な日程の中で①～④を優先した結果、補刻狀況の再檢證にまでは手が回らなかったのであろう。

③ 二〇一八年十月現在、畫像の閲覽には同館の閲覽證番號か、或いは中華人民共和國居民身分證の番號のどちらかによる登錄と認證が必要。

④ 但し、第十一册後表紙の裏張り（後表紙からは剝離している）の右下隅に、時計回りに九十度傾けて判讀不能の小さな楕圓墨印が捺されており、その隣に同じ向きで墨筆にて「申□□□□」と書かれている。これは所藏者の書き入れや藏書印というよりは、先にこのような文字が書かれていた紙が表紙の裏張りに用いられたものか？

⑤ なお、本誌所載の孫琳淨「石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の日本における受容の一側面――馬琴と北靜廬を手がかりに――」は、かつて馬琴が借覽したという北靜廬所藏の百回本の特徵が平田氏藏本と一致することを指摘している。

⑥ この和刻本については、白木直也「和刻本忠義水滸傳の研究――水滸傳諸本の研究その四――」（著者自印、一九七〇）で詳細に研究されている。

⑦ 平田氏藏本で版心下方の記載の有無を確認不能な三葉の内譯は、版心附近の印刷が非常に薄い卷四十七第十四葉と、版心下方を破損する卷六十三第一葉と、表第三行で本文が終わっていて表第十二行の中央付近以降の紙が切り取られている卷六十七第十三葉である。

⑧　上原の二〇一八年十月の調査では、巻三第十一・十二葉、巻四第五・六・七・八・十五葉、巻五第一葉、巻八第三葉、巻九第六葉、巻十二第一・四・五葉、巻十四第三・四葉、巻十六第五葉、巻十七第十一葉、巻十八第十一・十二葉、巻二十四第七・十六・二十八葉、巻二十六第九・十葉、巻二十八第六・七葉、巻三十四第二葉、巻三十六第八葉、巻三十七第八・十三・十四葉、巻三十八第五・六・九葉、巻三十九第十・十四葉、巻四十二第三葉、巻四十三第一・二・九・十・十四葉、巻四十四第十一葉、巻四十五第三・四葉、巻四十九第三・四葉、巻五十一第十一・十二葉、巻五十二第七葉、巻五十七第七・十・十二葉、巻五十八第一・二・十葉、巻六十一第二・四・十二葉、巻六十二第九葉、巻六十四第三・七・八葉、巻六十八第四葉、巻七十第六葉、巻七十一第四葉、巻七十二第一・二・七・八・九・十一・十二葉、巻七十四第三・五・六葉、巻七十六第三葉、巻七十七第一・二葉、巻七十八第二・五葉、巻七十九第一葉、巻七十九第十一葉、巻八十第一・二・四・五葉、巻八十一第四・八・十一・十二葉、巻八十二第三・九・十・十一・十二・十四・十五葉、巻八十三第五・八葉、巻八十四第九葉、巻八十五第一葉、巻八十七第六葉、巻八十八第七・八・十葉、巻九十第十一・十三葉、巻九十五第九葉、巻九十八第八葉にこれが比較的はっきりと認められた。

⑨　前注に同じ上原の調査では、巻三第五・六葉、巻十二第一葉、巻十六第五葉、巻二十四第二十三葉、巻三十二第十三・十四葉、巻五十五第五・六葉、巻八十二第十一・十二葉にこれが比較的はっきりと認められた。

⑩　前注に同じ上原の調査では、巻十六第三葉、巻二十八第一葉、巻三十第九葉、巻三十二第十葉、巻五十五第九・十葉、巻五十八第三・五葉にこれを認めた。

⑪　前注に同じ上原の調査では、巻十一第二葉、巻五十五第六葉、巻九十八第十六葉、巻百第十五葉にこれを認めた。

⑫　版木は使いこむほど墨を吸っていくため、作られた直後の版木やしばらく使っていなかった版木で刷られた本よりも、後刷りの本の方が文字が濃く刷られやすい傾向がある。とはいえ、中國國家圖書館藏本の刷りは決して濃くなり過ぎてはおらず、版木の問題に由來すると思しき刷りムラや漫漶の部分を除けば、全體的にほどよい良い濃さが保たれている。反りや埋木によって版面が均質ではなくなっている版木が少なからずあったらしいことも考慮に入れると、中國國家圖書館藏本はかなり腕の良い印工（刷り師）が刷りを擔當していたものと推察される。

⑬　こうした漫漶に對する補筆は、平田氏藏本の全體にわたって散見される。

⑭　このように原則に反する版木の使い方をしている箇所は他にも稀に見られ、例えば巻十二では第三・六葉と第四・五葉が、巻三十では第十二・十三葉が、巻五十八では第三・五葉

と第四・六葉がそれぞれ一枚の版木の表裏に彫られているようだし、巻十六第七・八葉や巻八十二第七・八葉はいずれも一枚の版木の表裏に上下を逆にして（＝左右を揃えて）彫られている。

⑮　原文は「只存「石渠閣補」四字（「康熙五年」挖去者二百三十七頁）」とするが、それでは意味が通らないため、文意を汲んで改めた。

⑯　これは荒木の二〇一五年八月の調査による數字で、「亦有一些雖無補刻標誌而字體與其他部分顯然不同的十一葉」として想定していた箇所は、巻五第五・六葉、巻十七第十三・十四葉、巻二十四第二十二葉、巻三十二第四・五葉、巻六十二第一・二葉、巻八十八第十三・十四葉。このうち巻三十二第五葉だけは二〇一八年十月の上原の調査では補刻とは看做さなかったが、それ以外の十葉はいずれも上原も何らかの補刻と認めた。それを承けて荒木も改めて寫眞を確認し、巻三十二の補刻は第四・五葉ではなく、第三・四葉がセットで補刻である可能性が高いことを認めた。

⑰　馬幼垣前掲書は、「補刊葉子共五十五葉」を各回に何葉ずつ認めたか（一〇七頁）、「零星補刊」を各回に何行ずつ認めたか（一〇八頁）、及びどの回には補刻を全く認めなかったか（一一二頁）というそれぞれの内譯も擧げている。

⑱　このため、補刻行の位置は原則として隣り合う葉同士で左右對稱なのだが、巻十六第七・八葉と巻八十二第七・八葉だけはそれぞれ同じ行が補刻である。そのため、この二組は版木の表裏で上下が逆に彫られていたと認められる。また、Fのうち巻九十二の末葉である第十二葉は、補刻の版木で刷られた行は平田氏藏本にも中國國家圖書館藏本にも殘っていない。しかし、同じ版木の表裏に當たる第十一葉の表第一～三行がFの補刻だと認められたので、第十二葉裏第十二行に彫られていたと推定される尾題の部分が補刻の版木になっていたはずだと判斷してFに分類した。

⑲　以上の諸版本の巻首題や所在については、前掲の本誌所載孫論文を參照されたい。

⑳　例えば、第十三葉裏第十行「還寨」の後に容與堂刊本北京B本・同内閣文庫藏本・覆容與堂刊本・四知館本では詩があるが、石渠閣補刻本・無窮會本・芥子園本・全傳本・全書本にはそれが無い。また、第十四葉表第五行「行事正是」の箇所は、容與堂刊本北京B本・同内閣文庫藏本・覆容與堂刊本・四知館本では「行事」と「正是」の間に約二行分の文章があるが、石渠閣補刻本・無窮會本・芥子園本・全傳本・全書本にはそれが無い。より細かい字句についても、容與堂刊本などの百巻百回本系統とは異なり全書本などの百二十回本系統と一致する例が散見される一方で、逆の事例は皆無である。

㉑　第十三葉表第五行「下士」は「下土」の、同第九行「一門」は「七門」の、裏第七行の「黑夜」は「夜黑」のそれぞ

れ誤刻。このうち「下土」は全書本以外は明らかに「土」に作るが、全書本のみ「土」とも「士」とも取れるような形になっているので、やはり底本は全書本であった可能性が高い。また、第十四葉表第一行「如當」は全書本も含めた他の版本ではいずれも「汝當」に、同第五行「妙計」は同じくいずれも「妙策」に作る。

㉒　卷十五第十二葉も卷十五第十一葉がBなのだが、兩者は字様がやや異なる感じがするので、同じ版木の表裏かどうかの判斷は保留したい。但し、卷十五第十二葉もBに見られる字様なのは確かなので、Kbには分類しておいた。

㉓　この朱圓印の中には、封面題「水」の縱畫上部のすぐ右の位置に「梁」という字がある。そのすぐ下にあるのも「園」か「閣」あたりの字のようにも見えるが、こちらは若干潰れ氣味である上に封面題の「水」に重なってしまっているため、原本を見ても字か否かははっきりとは分からなかった。

㉔　原本を閲覽せずとも、『中華再造善本』所收影印本か、或いは前述の「中華古籍資源庫」でウェブ公開されている北京B本の畫像によって確認することが出來る。なお、上海人民出版社影印本では、こういった殘酷描寫だけではなく、第二十一回後半の圖の閻婆惜の裸體のような性的な描寫にも改變を加えているので注意されたい。

㉕　中川諭「『李卓吾先生批評三國志』について」（『三國志研究』第十一號、二〇一六）で提唱された呼稱に從った。中川諭『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八）やその影響を受けた先行研究では、この版本は綠蔭堂本と呼ばれていたが、その呼稱には問題があるとして中川氏が新たに提唱したのがこの呼稱である。なお、この版本は、稀にではあるが「玄」に闕筆が見られる。

㉖　左下に「同志堂／藏板」と刻された封面の右欄に「江南省城狀元／境敦化堂裝兌」朱戳が捺されており、大半の葉の版心下部に「敦化」とある。井上進『明清學術變遷史』（平凡社、二〇一一）一七三頁では、「江南省城」は康熙六年に「江蘇省城」に改名されていることを根據にこれを康熙六年以前の刊本と看做している。しかし、この版本は「玄」ばかりか「弘」にもごく稀ながら闕筆が見られるので、乾隆以降の刊と見るのが妥當であろう。また、神戸大學人文科學圖書館所藏の同名の別版の封面にも「江南省城竒望／街李氏書林內／聚錦堂裝兌記」という朱戳が捺されているが、この封面には天頭に横書きで「乾隆丙子年（二十一年）新鐫」と刻されているので、「江南省城」という呼稱が康熙六年以降にも民間では引き續き行われていたことが分かる。よって、井上氏の見解は當たるまい。なお、神戸大學人文科學圖書館藏本と京大人文研藏本は、共通の底本をそれぞれ別個に覆刻した、言わば兄弟關係にあるものと思しい。（この注は專ら上原による。）

㉗　候補となり得るのは、明の隆慶、萬曆、泰昌、天啓、崇禎

と、南明の弘光、紹武、永曆、そして清の順治、康熙、雍正、乾隆、嘉慶、道光、咸豐、同治、光緒、宣統である。

㉘ 周文燿については上原前掲博士論文第五章「周氏萬卷樓と周氏大業堂の關係について――周如山をめぐって――」參照。

㉙ 現在見られる『書影』の一番年次の早い序文は康熙六年のものなので、『書影』が世に出された時期には既に石渠閣補刻本の版木は石渠閣の手元にあったはずである。

㉚ 上原究一「『大宋中興演義』と『皇明英烈傳』の王少淮雙面連式插畫本をめぐって」（瀧本弘之編『中國古典文學插畫集成（十）・小說集（四）』所收、遊子館、二〇一七）參照。

㉛ もしかすると、周亮工が『書影』卷一に「『續文獻通考』載：「羅貫中爲『水滸傳』、三世子弟皆唖」。此書未大傷元気、尚受報此、今之爲種種宣淫導慾之書者、更當何如？可畏哉」と書いているのと關係があるかもしれない。もしこの手の話が周亮工の父祖の代から傳えられていたものだったとすれば、そういった祟りの類を恐れて刊行者が名前を伏せたという可能性は考えられよう。

※本稿は日本學術振興會科學研究費平成二十九～三十年度若手研究（B）（研究代表者：上原究一、課題番號：一七K一三四三一）の助成を受けた研究成果の一部である。